伝書鳩

第19号

井上靖記念文化財団

布哇（ハワイ）の海

井上　靖

明方ベッドで波の音を聞いたのだから、波がない筈はないと思う。併し、ホテルのそのテラスで見る海は、油性のどんよりした動かない海だ。テラスにはいつも何組かの客が籐椅子に腰かけて海を見ている。夫婦者も椅子を並べているが、お互いに一言も喋らない。中には何時間もそうしているのがいる。海と人間たちの間に取引が行われていることは明らかだが、人間は絶えず支払う役ばかりにまわされている。そして、一文なしになった時、人間はふとわれに返って立ち上がる。だから、男も女も椅子から離れる時はひどく物憂げで孤独だ。ちょっと飛行機から降り立った瞬間の人間のような顔をしている。生命だけが残ったのがせめてものめっけものなのだ。

（『地中海』より）

伝書鳩 第19号　目次

布哇（ハワイ）の海（詩）　井上靖……2

ご挨拶　井上修一……6

井上靖先生と二つの唄「蒼き狼」と「井上讃歌」　中野暁……8

鳩のおしらせ①……15

第二回　井上靖記念文化賞　芳賀徹氏・織田憲嗣氏に……16

鳩のおしらせ②……23

井上靖の原郷　伏流する民俗世界 6　野本寛一……24

井上靖未発表資料紹介　草稿「復讐」……40

世田谷の家　浦城義明……50

平成二十九年度　事業報告　井上修一……56

図書だより……66

鳩のカット　福井欧夏

奥付のカット　岩永　泉

ご挨拶

理事長　井上修一

本財団の歩みは平成と共に進んでまいりましたので、来年平成が終わると知ると、これまでを思い返すことが多くなってきました。

父、井上靖は平成三年に亡くなりました。財団が設立されたのは翌四年で、認可は文化庁からでした。初代理事長を引き受けてくれた母は二十年に亡くなりました。父の四人兄弟で最後まで残っていた下の妹も今年の二月に亡くなり、残念ながら兄弟から平成を越える人は出ませんでした。父が晩年を過ごした世田谷の家も、建てられたのは昭和三十二年ですが、平成二十三年の夏に解体されました。ただ書斎と応接室だけは、お陰様で生誕の地の旭川にある井上靖記念館内に移築され、翌年の五月六日（父の誕生日）から、昔の形のままで一般公開されています。屋敷の残りの部分は、庭端だったところに私の家があるだけで、今は何も残っておりません。ただ、うれしいことに、元の敷地の一画に世田谷区が来年度予算で文学碑を建ててくださることになっています。

多くの皆様のご指導とご支援で設立後二十六年を迎えた財団ですが、二十九年度は旭川市との協同による財団運営も二年目に入り、お互いに相手のペースも分かってきて、運びがかなり滑らかになってきました。ことに井上靖記念事業実行委員会の方々には、財団の運営実務のほとんどをお引き受けいただき、感謝に堪えません。

財団の中心事業の「井上靖記念文化賞」も今年度は二回目になり、候補者の推薦や選考もスムーズに進みました。選考委員会の先生方のご努力により、昨年度に引き続き、比較文学者の芳賀徹氏、家具デザイン研究家の織田憲嗣氏のお二方にさしあげることが出来ました。来年の三回目は新しい元号のもとになりそうですが、新元号になりましても、旭川市をはじめとする皆々様方のご指導を何卒よろしくお願い申し上げます。

平成三十年十月吉日

井上靖先生と二つの唄

「蒼き狼」と「井上讃歌」

中野 暁（日本中国文化交流協会専務理事）

私が日中文化交流協会の事務局で仕事を始めたのは一九七三年、日中国交正常化が実現した翌年であった。当時、協会は中島健蔵理事長をはじめ、井上靖、千田是也、杉村春子、團伊玖磨、東山魁夷、水上勉、司馬遼太郎など錚々たる文化人が役員や会員に名を連ねていた。

私は大学で美術教育を専攻していたが、クラブ活動でヨット部に属し、大学選手権で好成績を上げたこともあり、卒業後はヨットスクールの講師をしていた。その頃、ヨットで遣唐使の航跡を遡りたいという冒険計画を立て、某新聞社のアドベンチャープランに応募した。審査を通り、残る問題はヨットで中国の領海に入る許可が得られるかということで、相談に行ったのが日中文化交流協会であった。「両国間に国交が回復したとはいえ、まだ個人がヨットで渡海できるような状況にはない」と親切に説明していただき、結局この計画を断念せざるを得なかった。しかし、中国への思いは断ち難く、後日、有楽町にある協会事務所を訪ね、日中文化交流協会で仕事をしたいと申し入れた。面接の際に二つの質問を受けた。「お酒を飲めますか」と「歌えますか」だった。就職の面接としては妙な質問だとは思ったが、その後、協会事務局員として仕事をしていくと、この二つが如何に大切であるかを納得することになる。

冒険プラン作成に夢中になっていた頃、各種の冒険小説を読んだが、井上靖先生が執筆された「天平の甍」もその一つだった。この作品は、戒律制度が確立していなかった奈良時代、授戒ができる高僧を唐から招聘するという使命を受け、遣唐使として大陸に渡った普照と栄叡を軸とした若い留学僧たちの運命を描いた物語だ。鑑真を擁して何度も東渡を試みる場面を読んだときは、ヨットマンとして胸躍り血沸き立つ思いであった。

1979年7月、熊井啓監督による映画『天平の甍』の中国ロケ地を訪れ、鑑真役の田村高廣氏をねぎらう井上靖氏（日中文化交流協会提供、写真は以下すべて同じ）

そんな私が「天平の甍」の作者である井上先生の謦咳に接するようになるとは、思いもよらぬことだった。井上先生は中島健蔵先生の後を受け、一九八〇年に日中文化交流協会の会長に就任された。そして九一年一月に逝去されるまで、数多く訪中され、また中国から来られる客人をもてなされた。この間、私は中国へお供したことはなかったが、事務局員として中国からの客人を先生の御自宅に案内したり、日中関係の会合に参加される先生を御案内したりする機会が多くなった。

「蒼き狼」

特に印象に残っているのは、井上先生が当時の経済界の重鎮と言われていた日本精工の今里廣記会長と銀座のバーにいったときの思い出だ。私もご相伴にあずかったのだが、酒を飲みながらの談笑が一段落したと

き、井上先生が今里氏に「あの唄やりましょう」と所望されたのだった。今里氏はやおら立ち上がって、腰ベルトを締め直し、マイクを持って歌ったのが「蒼き狼」だった。歌詞の内容は、モンゴルの遊牧民諸部族を一代で統一し、人類史上最大規模であるモンゴル帝国の基盤を築き上げたチンギス・カンをテーマにしたものだった。井上先生は今里氏の唄を嬉しそうに聴きながら、「ベルトを締め直すのは、今里さんのクセで、周りの人を安心させるのですね」と話された。井上先生は一九五九年から翌年にかけて「蒼き狼」を執筆、モンゴル帝国を築いた初代ハーンの生涯を描いていて、この無頼な歌詞が好きだった。一九八〇年には加藤剛主演で『蒼き狼 成吉思汗の生涯』と題しテレビドラマ化されている。

1982年に中国出版代表団で来日した宋木文団長（井上氏の左）と歓談する井上氏と今里廣記氏（井上氏の右）

テレビ朝日開局20周年記念として1980年に制作されたテレビドラマ『蒼き狼 成吉思汗の生涯』の撮影現場を訪れ、主演の加藤剛氏を励ます井上氏

余談になるが、今里氏が一九八五年に七八歳で逝去され、郷里である長崎県波佐見町に胸像が建てられた際、井上先生が碑文を書かれた。その中に「先生は性豪磊落、しかも周到細心、その為すところ盡く非凡なる見識に貫かれ、国家百年の大計より出でざるはなし。戦後日本の生める数少き志しの人と謂うべし。今日財界の指導者として重きをなす、盡し当然なり。知己は政、財界はもとより文化界にも及び、氏の人格を慕う者、常に氏の周囲に集まる」とのくだりがある。先生と今里氏は知己の仲だったことが窺える。

家に帰り、この唄の由来を調べると某大学の寮歌としても歌い継がれているという。ヨット部時代に愛唱していた各種の寮歌と共通していたので、私もすぐに覚えてしまった。今でも文化各界の方々と訪中し興が乗った際、「作家の井上靖先生が好きだった唄です」と紹介しながら、この「蒼き狼」を歌わせていただいている。

一、男一匹やるだけやれば
　なんのこの世にゃ　未練があろか
　吹けよ竜巻　アルタイ越えて
　俺も走るぞ　命の限り

二、胸に秘めたる男の夢は
　女なんかにゃ　分かりょうものか
　あごでしゃくりょか　小指でやりょか
　蒙古百万　篝火紅し

三、俺が死んだら裸のままで
　ゴビの砂漠に　うっちゃっておくれ
　どうせ俺らにゃ　狼の血が
　親の代から　流れているさ

「井上讃歌」

日中国交正常化が実現し、両国間に直行便が開設される前、中国訪問は香港を経由して二週間が当たり前、一カ月近くになることも度々だった。そんな長期の旅では、その日の公式日程を終えて団長の部屋に団員が集まり、酒を酌み交わしながらの歓談が至福の時間だった。カラオケなるものが無い時代、参加者は当然アカペラで持ち唄を歌った。井上先生の訪中に随行する

1988年に中国大使館公使として着任した唐家璇氏（現・中日友好協会会長、左から2人目）と呉熙華一等書記官（左端）を歓迎する井上靖・ふみ夫妻と白土吾夫氏（右端）

真向法を紹介する井上氏（1986年、北京）

機会が多かったのは、事務局の中心であった白土吾夫、佐藤純子、そして中国語が堪能な横川健だった。中でも白土は演歌、唱歌、童謡、講談、ものまねなど多芸多才で、替え歌にも才を発揮した。井上先生との旅を重ねる中、半世紀前に流行した「練鑑ブルース」という非行少年が逮捕されて練馬鑑別所へ連行されるときの心境を歌った曲を基に「井上讃歌」を作った。その後、作家や文化各界の方々との旅で、白土や佐藤がこの唄を披露したという。

井上先生は都内での会合が終わった後、夕刻に有楽町にある協会事務所に立ち寄られたことが度々あった。また、事務局全員を世田谷の自宅に招き、ふみ夫人の手料理でもてなしてくれたこともあった。そんな時、この「井上讃歌」を事務局員が合唱したものである。御自宅での会はだいたいが夜中近くになってしまうが、井上先生は照れるような表情をしながら、この唄を聞かれていた。ある時はお暇しようとする我々を引き留めて、御自身の健康法である「真向法体操」を披露されたこともあった。今思い返すと夢のような時間だった。

一、北の岬は旭川
　呱呱の声あげ湯ヶ島で
　しろばんばをば眺めては
　父と母とを思い出す

二、沼津中学俊才で
　「北の海」見て柔道に
　励みしあとにはよき友と
　香林坊で詩にふける

三、賀茂の河原に水やせて
　文学の夢断ちがたく
　「毎日」に入れば大記者で
　戦の終わりを世に告げる

四、「明治の月」はさえわたり
　「猟銃」、「闘牛」世に問うて
　芥川賞皮切りに
　打って出ました文壇へ

五、「氷壁」、「射程」、「黒い蝶」
　歴史の波に漂って
　生きてゆく人滅ぶ人
　「一期一会」を書きつづる

六、「敦煌」、「楼蘭」、また「甍」
日本文化の源を
遠くたずねて人々に
知らせし功忘られず

七、河西回廊（かせいかいろう）ひた走り
隣にいるは半世紀
尽くしてくれたいとし妻
見よあこがれの「敦煌」を

八、草原走る「狼」の
背すじに光るその蒼さ
栄枯盛衰夢に見て
蒙古の涯に君は立つ

九、ミーラン、チェルチェン、ホータンと
訪ねし跡は数知れず
推され推されて日中の
文化交流の総帥に

十、利休、西行、わだつみ、よ
さらに孔子に挑まんと
「斬り死せん」と進む君
「馬前に死せん」とこたう我

⊙井上靖記念館（旭川市）

【企画展】

○「井上靖と登山」展（～平成三十一年一月二十七日）
井上靖の穂高に寄せる思いをエッセイと写真で示し、登山家を描いた小説「あした来る人」と「氷壁」を通し、靖の登山に対する思いを探ります。靖を中心とした穂高登山の会「かえる会」の句集から靖の句を紹介します。

○「井上靖『海峡』」展（平成三十一年二月二日～四月七日）
小説「海峡」の舞台となった青森県下北半島での取材の様子を紹介する他、現地の文学碑や関連する事物とともに作品の魅力に迫ります。さらに「海峡」の挿絵を手掛けた福田豊四郎の絵画、登場人物のモデルである鳥類研究家・蒲谷鶴彦旧蔵品も展示します。

問い合わせ：井上靖記念館
北海道旭川市春光五条七丁目
☎〇一六六―五一―一一八八

⊙井上靖文学館（長泉町）

【企画展】

○開館四十五年記念展「井上靖と映画――銀幕を彩った作品たち」展（～平成三十一年三月十九日）
井上靖の作品は「映像が目に浮かぶ」と言われ、これまで四十三作が映画化されました。本展では、映画化作品についての資料のほか、井上が新興キネマ社の脚本部でシナリオ作成に関わった「白銀の王座」（一九三五年）の広告、ロケ写真などを展示します。

【文学館講座】

○「脚本部時代の井上靖と映画『白銀の王座』」
平成三十一年三月三日（日）一四～一五時
講師・根本隆一郎（ＮＰＯ法人・古き良き文化を継承する会代表）

問い合わせ：井上靖文学館
静岡県長泉町東野クレマチスの丘五一五―五七
☎〇五五―九八六―一七七一

第二回　井上靖記念文化賞　芳賀徹氏・織田憲嗣氏に

井上靖記念文化賞について

一般財団法人井上靖記念文化財団では、平成五年から「井上靖文化賞」を実施し、小澤征爾氏やドナルド・キーン氏など、各分野において顕著な実績を残された著名な文化人に賞を贈ってきましたが、平成十九年の第十五回を最後に中断されていた経緯があります。旭川市と井上靖記念文化財団の連携により、平成二十八年に設立した「井上靖記念事業実行委員会」では、これまでの文化賞の流れを汲みつつ、新たな視点を取り入れて制度を再構築し、優れた作品や活動実績を有し、またその活動を通じて継続的に地域や社会への貢献を行い、これからの更なる飛躍が期待される個人又は団体を対象とする「井上靖記念文化賞」を創設しました。

井上靖が数々の名作を生み出し、日本を代表する作家となった足跡や、生涯、各分野の芸術家と交流を持ち、文化芸術への関心と情熱を持ち続けたその業績と遺志を継承する本賞が、各地で活躍されている方々や団体の更なる飛躍のきっかけとなり、更なる文化の発展に寄与することを期待します。

第二回井上靖記念文化賞の選考委員会は、平成三十年二月十七日、東京ドームホテル（東京都文京区）にて、贈呈式は平成三十年五月十九日、アートホテル旭川（北海道旭川市）にて行われました。

第二回　井上靖記念文化賞

芳賀　徹（はが・とおる）

東京大学名誉教授、国際日本文化研究センター名誉教授

贈賞理由「近世・近代に於ける文学美術等の魅力の探求と紹介に寄与したことに対して」

受賞のことば

私は井上靖氏の作品をそう沢山読んでいるわけではない。だが『氷壁』も『楼蘭』も『しろばんば』も、読みだすともうやめられず、机の上でベッドの中で夜どおしで読み耽ったものだった。新聞記者時代の氏の美術批評を全集版で読み漁り、その着眼のよさ、面白さについて学会で報告したこともあった。とくに岡倉天心の五浦（いづら）時代、毎日のように海（太平洋）に出る彼の小舟の船頭をした人と昼の弁当を作った人の、地元の老漁師二人への会見記など、井上氏の心づかいの優しさが伝わって、今も忘れられない。中国清初の画僧石濤の作に触れた後年のエッセイもよかった。その感触を受けついで私はいま、陶淵明以来の中韓日における桃源郷の詩画の系譜を一冊にまとめつつある。

こうしてみると、私も意外なほどに井上氏の文章の恩恵を受けている。このたびその人ゆかりの賞を頂くとは思いもよらぬよろこびだ。主催者、選考委員の方々に厚く御礼申し上げる。昨年の私の論文集『文明としての徳川日本』（筑摩書房）も、芭蕉やケンペル、

新井白石や貝原益軒、また光悦や宗達、久隅守景や鈴木春信、そして平賀源内や杉田玄白や渡辺崋山などに、彼らの文章と絵画作品をとおしてインタヴューをしているような感じの文化史論集だった。作家井上靖氏のあの豊かな教養と経験、心の寛容と洞察の鋭さ、親密さを、残りの生涯をとおしてこれからも学びつづけようと、あらためて思う。

経歴

一九三一年　五月九日、山形市に生まれる
一九五三年　東京大学教養学部教養学科フランス分科卒業
一九六三年　東京大学教養学部専任講師、六五年助教授、七五年教授、文学博士
一九八一年　『平賀源内』でサントリー学芸賞受賞
一九八四年　『絵画の領分』で大佛次郎賞受賞
一九九二年　東京大学定年退官。東京大学名誉教授
　その後、国際日本文化研究センター教授、大正大学教授、京都造形芸術大学学長等を歴任
一九九七年　紫綬褒章受章
一九九八年　岡崎市美術博物館館長（二〇一一年まで）
二〇〇〇年　京都新聞文化学術賞（比較文学）受賞
二〇〇六年　瑞宝中綬章受章
二〇一〇年　静岡県立美術館館長（二〇一七年まで）
二〇一一年　『藝術の国日本――画文交響』で蓮如賞受賞
二〇一七年　静岡県立美術館名誉館長
二〇一八年　『文明としての徳川日本』で日本芸術院賞恩賜賞受賞

主な著書

『明治維新と日本人』『平賀源内』『與謝蕪村の小さな世界』『絵画の領分』『文化の往還』『詩の国詩人の国』『詩歌の森へ――日本詩へのいざない』『ひびきあう詩心――俳句とフランスの詩人たち』『藝術の国日本――画文交響』『文明としての徳川日本』など

選評

〝文人学者〟の巨星

辻原　登（選考委員代表）

芳賀徹氏の業績は多岐に亘り、数え上げればきりがない。氏は、戦後日本における「比較文学（comparative literature）」の泰斗として夙に知られるが、「比較文学」という学問の領域を大きく越えて、その著作の一つ一つは歴とした「文学作品」としての魅力を放っている。

氏の思索の中心には詩魂がある。詩魂は東西の文明・文化を繋ぐ唯一の普遍言語である。

ヨーロッパ文明と漢文明と日本文明の間を自由に往還する詩魂が、『平賀源内』（サントリー学芸賞）、『絵画の領分』（大佛次郎賞）、『藝術の国日本――画文交響』（蓮如賞）、『與謝蕪村の小さな世界』、『詩歌の森へ――日本詩へのいざない』、そして大著『文明としての徳川日本』などの作品となって結実した。特に氏が名付けた「パクス・トクガワーナ（徳川の平和）」というフレーズは、我々に日本史への新鮮な見方を提供してくれた。

また芳賀氏は、東京大学教授、国際日本文化研究センター教授、京都造形芸術大学学長などを歴任して、数多くの有為の人材を斯界に送り出すと共に、岡崎市美術館館長、静岡県立美術館館長を務めて、類い稀なアート・プロデューサーとしての手腕によって、これらの美術館の権威を高めた。

芳賀徹氏の存在を一言で形容するのは難しいが、「いまや世に稀となった〝文人学者〟の巨星」と呼ぶのが相応しいかもしれない。そこに、井上靖文学の貴重な継承の一例を見ることができよう。

第二回　井上靖記念文化賞　特別賞

織田憲嗣（おだ・のりつぐ）

東海大学名誉教授、東川町文化芸術コーディネーター

贈賞理由「椅子と暮らしのデザイン研究、家具産業の振興及び後進の育成への寄与に対して」

受賞のことば

私は若い頃から美醜に対して拘りをもち、特に身の周りに存在する美しい日用品など、優れたモダンデザインの品々から大きな影響を受けました。それらの中には五〇年前に購入した腕時計や万年筆、マフラーなど、七〇歳を過ぎた現在も飽きることなく大切に使っております。こうした価値観や審美眼が今日の私に繋がっているようです。

日本ではアートに比べ、デザインに対する評価は、分野ごとの賞を設けることがあっても、デザイン文化としての評価は確立されているとは言えないように思います。また、アートは文部科学省、デザインは経済産業省という管轄官庁の違いがあります。そのためかデザインの評価が経済活動の面に重きを置いた数値による評価となっているようです。その結果、先進国でありながら、唯一、本格的なデザインミュージアムを有していない国なのです。デザインは「より多くの人達のために」という、量産を前提に生まれたものです。この本質的な部分が、ややもするとデザインのデメリットとして捉えられてきたと考えられます。欧米ではデザインもアートも文化省が管轄しており、そのためデザインの芸術性や文化性が区別されることはなく評価されます。

日本でも欧米の先進国のようにデザインに対する認識を変えたいとの一心で、優れたデザイン作品の研究とその収集に務めてまいりました。それらをデザインミュージアムとして、そして後世の若い人達のための文化遺産として伝えてゆくことができれば幸いです。

この度の賞はこれまで支えて下さった家具業界、各自治体の皆様方の御力添えの賜物であり、改めて御礼申し上げます。

経歴

一九四六年　七月七日、高知県に生まれる
一九七〇年　大阪芸術大学卒業（芸術学部デザイン学科グラフィックデザイン専攻）、高島屋大阪支店宣伝部入社
一九七八年　独立し、「織田イラストレーション事務所」を設立
一九八九年　名古屋で自身初めてのコレクション展「デンマーク180脚の椅子展」を開催。以降、大阪、東京、旭川等日本各地にてコレクション展を開催
一九九四年　北海道旭川市に移住
北海道東海大学（現東海大学）芸術工学部教授（二〇一二年まで）
一九九七年　デンマーク家具賞受賞
二〇一二年　東海大学特任教授（二〇一五年まで）、東海大学名誉教授
韓国・ソウル市で「フィン・ユール展」を開催
フィン・ユール協会名誉理事（デンマーク）
二〇一五年　第一回ハンス・J・ウェグナー賞受賞（デンマーク）
北海道上川郡東川町文化芸術コーディネーター

主な著書

『日本の家――北から南まで』『ハンス・J・ウェグナーの椅子100』『スワル・パワーを形にした！

200脚の椅子』『フィン・ユールの世界』『デンマークの椅子』『イラストレーテッド・名作椅子大全』など

選評

デザインの魅力と役割

酒井忠康（選考委員代表）

昨年五月、わたしは偶々足をはこんだ道立旭川美術館で「デンマーク・デザインの魅力　織田コレクションと旭川」展を見て、あまりにも素敵な展示だったので、こんな人がいるのかと思い、しばらく呆然としていた。日本・デンマーク国交樹立百五十年にあたる年でもあったようだが、わたしの頭を過ったのは、ほかでもない。司馬遼太郎氏が『街道をゆく夜話』（朝日文庫）で、日本人の持っていたロマンティックなヒューマニズムが辛うじて残っているのは、北海道であるから――と言って、デンマークのような国を目指したらどうかと書いていたのを思い出したからである。

織田憲嗣氏は、家具好きだった父の影響を受けて、若い時期から欧州作家の椅子や日用品のデザインに魅了されて収集の道にはいった。同時にイラストレーターとしても活躍し、その間に家具の本格的な研究をこころざして頻繁に渡欧。とりわけ優れたデザイン性と耐久性をそなえたデンマークの椅子に魅了されるところがあったという。

いずれにせよ、世界でも貴重な椅子をはじめテーブルやキャビネットなどのほかに、ガラス器や陶器あるいは数万点のデザイン関係の書籍やポスターなどを収集した「織田コレクション」は、世界各地のデザイン・ミュージアムに匹敵する内容である。

井上靖記念文化賞は幅広い賞であり、そのためにジャンルを異にした候補者が出てくる。常設の賞ではないが、この度、選考委員全員一致で、織田憲嗣氏の業績に対して「特別賞」を贈ることに決定した。

第一回受賞者

菅野昭正（世田谷文学館館長・文芸評論家）

小田　豊（六花亭製菓株式会社前代表取締役社長）

井上靖記念文化賞選考委員会委員

選考委員長

篠　弘（歌人・日本現代詩歌文学館館長）

選考委員

斉藤佳典（北海道新聞社編集局文化部長）

酒井忠康（美術評論家・世田谷美術館館長）

辻原　登（作家・県立神奈川近代文学館館長）

藤澤　全（元日本大学教授・国際関係博士）

鳩のおしらせ②

⊙ベトナム「井上靖賞」受賞者の来日講演

本財団が、国際交流基金ベトナム日本文化交流センターと共同で設立した「井上靖賞」（ベトナム日本文学研究論文コンテスト）の第二回受賞者（第一位）であるグエン・ナム氏が、平成三十年八月二十三日に開催されたアジア・フェロー・セミナー（国際交流基金アジアセンター主催）において講演をなさいました。「幻のベトナム固有文字「チュノム」の世界」と題し、「チュノム」の解説とその最新研究動向、またフランスによる植民地統治における文化・言語政策について報告し、好評を博しました。

「チュノム」とは漢字を元にしたベトナム独自の形声文字で、一九四〇年代まで七百年にわたり使用されてきたものです。

＊――井上靖記念文化財団は、オーストラリア・ニュージランドとベトナムにおいて、それぞれ現地の方々のお力をお借りし「井上靖賞」を設け、日本文化の研究助成を行っております。

井上靖の原郷

伏流する民俗世界 6

野本寛一（近畿大学名誉教授・民俗学）

馬の湯

湯ヶ島の黄金風景

井上靖は幼少年期から馬に関心を寄せていた。『しろばんば』に次の記述がある。「洪作たちは西平（にしびら）の共同湯を選ぶ場合、もう一つの理由があった。それは共同湯のすぐ隣に馬の湯があって、よく馬がここで体を洗われていることがあったからである。長方形に仕切られた浴槽は、勿論屋根も持っていず、人のはいる方の浴槽に較べると、ずっと浅かった」――。少年期の眼によって描かれている。

『幼き日のこと』の中にもこの馬の湯が登場するのだが、こちらは幼年期の眼ざしによるもので、描写は詳細である。「春らしい季節感を持っている二つの記憶の断片がある。一つは、春の白っぽい夕暮の中で、おかのお婆さんと二人で、馬が野天の浴槽で体を洗って貰っているのをみていた記憶である。西平という字の共同湯の隣りに、そこから流れ出す湯を集めて、深さ二尺ほどの浅い四角な浴槽が造られてあった。共同湯はもちろん建物の中に収められてあるが、この方は野天風呂である。近くの農家の人たちが農具を洗うために造ったものであったが、おそらく私の記憶の舞台はそこであろうと思われる。おかのお婆さんに連れられて西平の共同湯に出掛け、入浴をすませたあとで、隣りの野天の浴槽で馬が体を洗われていたのを見ていたのであろう。馬は浅い浴槽の中に立っている。男の人がバケツで湯をかけては、その体を藁か何かでごしごしこすっている。それを見物していただけの記憶であるが、何かほのぼのとした明るいものがこの記憶を彩っている。……私も、おかのお婆さんも、附近の石にでも腰を降ろし、何のへんてつもない馬の入浴を、案外倦きずに眺めていたのかも知れない」――。

たしかに回想の馬の湯の情景の核心には、「何かほのぼのとした明るいもの」があったにちがいない。ここには靖の生きものに対する眼ざしの原点がある。そして、それを喚起させているものは「馬の湯」という民俗に底流する、馬に対する人のやさしさである。馬が馬の湯の恵みに浴するのは、まず、田植にかかわる水田の荒起（あらお）こし・代掻（しろか）きなど、いわゆる馬耕の後の土おとしであり、馬の重労働に対する癒しでもある。荒起こし、代掻きの期間は、大豆や麦、稗（ひえ）を煮たものなど、馬に特別な餌を与えるのは全国共通の慣行だった。

岩手県花巻市石鳥谷町戸塚小字蒼前（そうぜん）に、馬の守り神「蒼前」を屋号とし、代々馬を扱い続けてきた藤原家がある。当主の昭男さん（昭和二十年生まれ）は以下のように語る。「山仕事をさせた場合には馬の足や脚は洗わない。しかし、馬に代掻きなどの農作業をさせた場合には、川の中を歩かせ、足・脚から腹まで丁寧に洗ってやったものだ」――。

馬の湯の民俗

「馬の湯」は中伊豆温泉地帯の民俗だった。その詳細については相磯守氏が「中伊豆地方の「馬の湯」」（『伊豆の国　第二集・特集温泉』木蓮社・二〇〇〇年）として報告している。中で相磯氏は湯ヶ島の他に、修善寺・大仁（おおひと）・大見・古奈などの事例を紹介している。田植の代掻きなどに馬を使って、作業終了後に馬を至近の馬の湯につれて行って脚や体を洗ってやり、足を温泉にひたらせてやる。こうして馬の疲れを癒してやるという慣行が民俗として生きていたのである。

代掻きに馬が使われ始めた時代は定かではないが、中世の匂いを色濃くとどめた「田植唄」の中に代掻き馬が登場する。

〽田郎次（田主）さん　代掻き馬を揃へられた　黒鹿毛馬を九匹まで　（御殿場市中畑）

〽田郎次さん　代掻き馬を揃へたる（り）　葦毛の馬を十三匹　（御殿場市玉穂）

〽今日の田の代馬は馬子千疋をそろひ（へ）た　（富士市松野）

泥田へ入った馬の足を水で洗ってやるのは一般的なことなのだが、それが温泉であり、さらに一定時間温泉に足・脚をつけることができるとすれば、馬にとってはこの上ない幸いである。

温泉にひたってうっとりとしている猿の映像はテレビでもしばしば放映される。山形県湯殿山の霊泉の一角で数匹の青大将がトグロを巻いていた姿は忘れがたい。動物は温泉を好むのである。「温泉発見譚」で獣や鳥が発見者として伝えられる例は全国的に広く分布する。それは伊豆にもある。「猪戸温泉は、葦の生えた荒蕪地であったが、野猪の手負いが来て叢の出湯に浴して傷を癒していたのを見て温泉を開いたという」（静岡県伊東市松原、柳田國男監修・日本放送協会編『日本伝説名彙』一九五〇年）。類似の骨子を持つ「鹿の湯」としては長野県南佐久郡南牧村、岐阜県恵那市岩村町、三重県の湯の山温泉、福井県大野市の鹿井の湯などがあげられる。他に、猿の湯・鶴の湯・鷺の湯・鴻の湯・鳩の湯など多々ある。

人が生きものから温泉の在り処を学び、学んだ人間が、時に重い労働を果たした馬を癒すために「馬の湯」を設けた心は温い。井上靖の馬の原風景に西平の「馬の湯」があったことは見逃し難い。

ところで、現在その馬の湯はどうなっているのか。「湯道」と呼ばれる西平の共同浴場へ下る道がある。「湯道」と刻まれた古風な標柱（写真①）からさらに川へ向かって進むと河鹿の湯と呼ばれる共同浴場がある。その左手、西平橋寄りの川端に、河原石をセメントで固めた径一・三メートルほどの丸い浴槽がある（写真②）。現在、湯ヶ島の人びとはこれを「犬猫温泉」と呼んでいる。傍には写真③のような標示があった。

右：写真①　「湯道」の標柱
下：写真②　「馬の湯」のこころを継承する「犬猫温泉」
上：写真③　「犬猫温泉」標示
（写真①～③はすべて伊豆市湯ヶ島字西平）

馬の湯の変容である。靖の描いた馬の湯は河原に近いところにあり、馬が足・脚をつけることのできる広さがあったのだが、これは、昭和三十三（一九五八）年九月二十六、二十七日の狩野川台風の折に流失してしまったという。時の流れの中で馬の湯が犬猫温泉に変容したのである。湯ヶ島字長野の浅田喜朗さん（昭和十五年生まれ）によると、長野で馬耕が行われた最後は昭和三十五（一九六〇）年だったという。

馬車――異郷憧憬の揺籃

井上靖を育んだ地、湯ヶ島は伊豆半島の真中、天城山北麓で、東海道筋へ出るにも南の下田へ向かうにも下田街道によらなければならなかった。靖がもの心ついたころ、下田街道には馬車が通っていた。靖の作品にはたびたびその馬車が登場する。

靖少年と馬車とのかかわりをよく示しているものに随筆「湯ヶ島」（『井上靖全集』第二十三巻・新潮社）がある。「私が小学校の四五年の頃（大正八九年）、修善寺から下田までバスが通うようになったが、その前の交通機関は馬車であった。毎日三四回、当時駿豆線の終点であった大仁まで、六人乗りの鉄輪の馬車が石ころ道を跳ね上りながら通った。私たち子供たちはよく駐車場に集って、馬車を送り迎えした。馬車を送る時は、馬車と一緒に駈け出して、隣部落との境いの橋のところまで行って、そこで馬車と別れた。馬車を迎える時は、馬車の喇叭の音が聞えて来ると、その橋まで出向いて、ありったけの歓声を上げながら、馬車と一緒に駐車場へゴール・インしたものである。私たち子供が特に馬車に関心を持ったのは、その馬車に依って必ず何か都会の匂いを持ったものが運ばれて来たからである」――。

右の文章の中にはⓐ馬車からバスへの転換、ⓑ少年たちの馬車の送迎と、馬車の運びくる都会的なものへの憧れ、ⓒ隣部落との境の橋――境界意識、という重要な小主題が語られている。以下、順を追ってこれらのことについて言及する。

馬車からバスへ

馬車からバスへの転換、この交通手段の変容は、ムラびと、街道ぞいの人びとにとって大きな事件だった。とりわけ馬車の馭者にとっては深刻な問題だった。『しろばんば』の中にこの転換について馬車曳きの兵作と小学校の小使のおっさんの口論が描かれている。それを受けての洪作の思いが次のように語られる。

「バスが走ることで、馬車曳きの兵さんは本当に困るだろうと思った。洪作は兵さんという人物に平生余り好感は持っていなかったが、しかし、兵さんが馬を可愛がるのを見るのは好きだった。子供たちが馬にいたずらでもしようものなら、兵さんは顔を真っ赤にして憤ったが、反対に馬に人参を与えている子供たちでも見つけようものなら、相好を崩して心から礼を言った。……洪作は一年程前駐車場に兵さんを訪ねて、馬の話を聞いて作文に書いたことがあった。兵さんはその時、この世に馬ほど可愛いものはない。どんな辛い時でも一言も文句は言わない。ただ大きな涙を眼から出して泣くだけだと言った。馬が実際に大きな涙を流すかどうか洪作はその真偽の程を質す知識を持っていなかったが、しかし、その話には心を打たれた。そうしたことがあったので、洪作は兵さんと小使のおっさんとの喧嘩では、兵さんに味方したい気持の方が強かった。だが、第三者として傍観している限りでは、小使のおっさんの方に分があり、兵さんの方に敗色濃いものがあった」――。

ここではまず、洪作に仮託された靖少年の行動と思いに注目したい。馬の作文を書こうと思って兵さんのもとに出むいている点である。これは、あきらかに後の新聞記者、作家の情報収集につながるものがある。このインタビューで「馬の涙」に遭遇したことは、幼時、おかのおばあさんと眺めた、馬の湯で脚や腹を洗われる馬のうれしそうでやさしげな目を想起させたことであろう。

馬の涙については私も強く心に刻んだことがあった。以下は、長野県木曾郡木曾町開田高原西野の加村金正さん（昭和十四年生まれ）による。――中学時代までは常時二、三頭の木曾馬を飼っており、七月の馬市に

たびたび二歳馬を送り出した。市出しに至るまでの間には、仔馬とともに遊び、仔馬をつれて歩き、日々親しんだ。市出しの日には大釜で大豆・稗など馬の好物を煮て、馬頭観音に供え、馬にもぞんぶんに喰わせた。家族はおのおの馬の顔に頬ずりして別れを惜しんで送り出す。二歳まで育てると情が移っているので別れがつらかった。「馬は涙を流しますよ」「馬は涙を流します。私は何度も見ました」、加村さんはくり返して強調した。

馬車からバスへの転換は各地で行われたのだが、その時期は一様ではなかったし、変容によって消えたものも様々である。

静岡県磐田市中泉と、浜松市天竜区二俣の間にも馬車が通っていた。磐田市寺谷の源馬秀保さん（明治三十五年生まれ）は大正十二（一九二三）年一月十日、浜松六十七連隊に入隊した。その日、秀保さんは馬車に乗って中泉へ向かった。三ツ入、寺谷、野部には立場（馬車・人力車などの休憩所）があった。寺谷の立場には美濃屋という店があった。美濃屋の前で馬車が止まると必ずおかみさんが表へとび出してきた。彼女はいつも、馬車の後から車中を覗いて客の人数を数え、客の数だけお茶を用意して客に飲ませるのだった。別当（馭者）はその間に馬に水を飲ませる――二俣街道に見られたのどかな風景だった。出征する秀保さんの心にこの光景は車輪のリズムとともに刻まれた。満州における二年間の兵役を終え、磐田の駅に下りたのであるが、その時には馬車も馬も消え、代りにバスが走っていた。

馬車の双方向力

閉塞性を意識させる天城北麓の谷という環境に生きる少年たちにとっては、靖の記した通り、馬車は常に都会・異郷の匂い・珍しいもの新しいものを運んでくる存在だった。そして、馬はその馬車を牽引する力ある生きものだった。馬車は、都会からの温泉客、営林署へ赴任する者、大学生、都会からムラへの帰省者などを運び、それは作品の中にも多く登場している。馬車は入り来るもの、外なるものを運び来る存在である反面、内なるものを外へ運び出してくれる存在でもあった。靖・洪作・鮎太は馬車に乗って豊橋・沼津など都市部に出て刺激を受け、馬車によって下田という異郷を訪うのである。

『しろばんば』に、洪作がおぬい婆さんとともに天城隧道を越えて下田に向かう場面がある。「馬車がひんやりとしたずいどうを抜けて賀茂郡へ一歩踏み込むと、洪作の胸はある感動で大きくふくらんだ。もうさき子の事は思わなかった。思う暇がなかった。馬車はいまや他国の風景の中を、南伊豆を、天城の向う側を、やはりある感動で身ぶるいしながら走っていた。」――異郷への道、異郷への憧れ、異郷との境については後にもふれる。

馬とばし

行事の深層

靖少年たちは国士峠（五一〇メートル）の向うの筏場で行われた「馬とばし」と呼ばれる草競馬に強い関心を寄せていた。『幼き日のこと』には次のように描かれている。「祭ではないが、毎年四月三日に、小さい峠を一つ越えた隣村の筏場というところで馬飛ばしがあった。馬飛ばしというのは競馬のことで、その日は、近郷の農家の青年たちが馬をひいて筏場に集った。丁度桜の季節で、馬場には何本かの桜樹が植えられてあり、花見をかねての競馬見物であった。私たちの村からも二、三人の若者がその草競馬に出場した。紺屋の次男が名手ということになっており、毎年、その季節になると、若者の名があちこちで囁かれて、その草競馬の騎手は人気者になった。」――このほか「馬とばし」は『しろばんば』をはじめ、随筆「私のふるさと」や短篇集『あかね雲』の中にも登場する。

馬とばしが「花見」を兼ねたものであることは作中でも指摘されているのだが、この行事を民俗的に見ると、「春山入り」「山行き」「高い山」などと通底しているところが注目される。四月三日は旧暦三月三日の月遅れだとも考えられるのだが、四月三日は神武天皇祭として知られてもいる。静岡県藤枝市ではこの日を

「神武さんの日」と称して、「山行き」「山遊山」が盛んに行われていた。

以下は藤枝市上大沢の種石昌雄さん（大正九年生まれ）の体験である。「四月三日は山遊山と称して孫甚平（上之山）へ登った。ムラから徒歩で約一時間かかったが、山頂からは焼津の海も大井川も見えた。下ると山葵沢もあった。子供・青年・中老などが登り、弁当・焼きむすび・スルメ・落花生などを食べた。一週間前から準備した万国旗を飾り、楽隊演奏も行われた。昭和十三（一九三八）年までは和笛と和太鼓だったが、十四年からは洋楽器の楽隊になった。出征兵士の壮行に際して他部落に圧倒されることのないように洋楽器にしたのである。」

「馬とばし」には出店も出るし、宴も盛んで馬も走るのだが、この行事の底には、四月三日という時期からして、「山行き」「春山入り」の要素が生きている。「山行き」は「庶民の国見」である。己れの住む地を眺望し、己れの耕す田畑を褒め讃え、土地の霊を活性化させ、よって恵みをたまわるという深い祈りの伝統が潜在した。溯源すれば、春の山の活力をいただいて里に迎えるという要素もあった。こうした呪的要素は次第に稀薄化し、時の流れの中で、行楽的、娯楽的要素が増えることになる。短篇集『あかね雲』所収の「馬とばし」の中に次の一文がある。「富士なら、馬とばしのところから見た富士がきれいですよ。あそこの富士に勝るものは、この辺にはないでしょう。」――山行きは、目的地に至るまでの眺望も重要で、「馬とばし」に関して言えば国士峠からの眺望も重要であるが、これについては後にふれる。

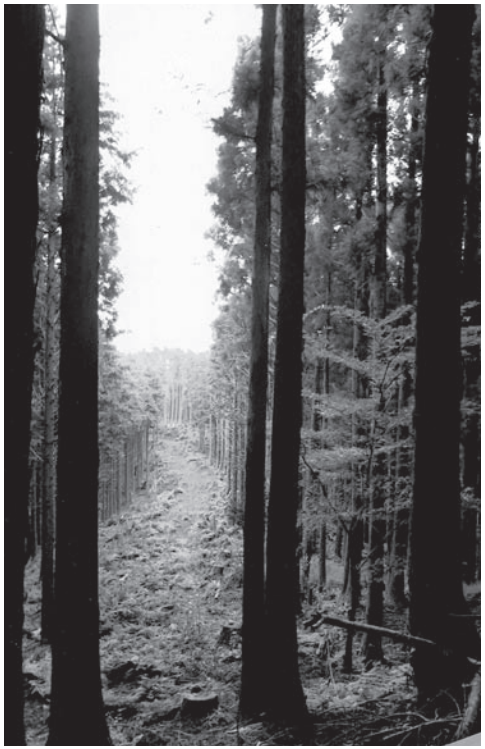
草競馬に限ってみても、民俗的な匂いはある。すべての農家が馬を持っているわけではない。馬を飼っている者が、馬を持たない農家の田の賃犂きに傭われることもあった。傭う側は当然、力のある馬、馬の扱いの巧みな使い手を選ぶ。草競馬はその見本市にもなった。「紺屋の次男」清さんはよい使い手だということになる。因みに代掻き賃は、長野県飯田市下瀬の場合、昭和二十年代で、一日分が田植日当四日分だったという（上松壮人さん・大正十五年生まれ）。

国士峠の景観変化

湯ヶ島から国士峠までは約四キロほどである。『しろばんば』では国士峠について次のように描かれている。「洪作たちは国士峠まで休まず駈け、峠へ登り着いた時、その峠附近の山の斜面を埋める茅の原へ身を埋めて休んだ。この附近は茅がいっぱい生い繁っているので、普通村人たちからは茅場という名で呼ばれていた。茅は一、二尺の長さに伸びているところもあれば、正月の山焼きですっかり焼かれて黒い焼跡を見せているところもあった」――。国士峠は草山だったのである。山草には、屋根葺き素材となる萱と、肥料として田に入れるカッチキ（刈敷）や牛馬飼料にするマグサを総称するヒグサ（干草）とがあった。湯ヶ島長野小字箒原の浅田喜朗さん（昭和十五年生まれ）は山草について次のように語る。長野地区共有の草山は上野平で、そこは二町五反歩あった。箒原が標高三〇〇メートル、四〇〇メートル以上が萱場で、四〇〇メートルまでがヒグサ場だった。萱場は、毎年二月半ばに一戸一人ずつ出て山焼きをした。良い萱を生やすためである。幅八メートルの防火帯を作り、区長の指揮で、山の上部から点火し、徐々に焼きおろした。

浅田さんは、国士峠は、古くはコクサバ（小草場）峠と呼ばれていたとも語った。小草峠が国士峠へと転訛した道筋もわかるし、靖少年が茅場に身を埋めたことも実感できる。

『幼き日のこと』では国士峠が以下のように描かれている。「峠まで一時間半ぐらいかかったことであろうと思う。峠から自分たちの集落全体が小さく見えた。その中に小学校も玩具のように置かれてあった。峠で休んでいた大人の一人が、――見ろ、あそこに富士山が見えている。と教えてくれた。――知ってらあ。――海も見えている。――海なもんか。――ばかだな、こいつら。ちゃんと海が見えているじゃねえか。実際に海は見えていた筈である。二、三年前にこの峠に立ったことがあるが、伊豆半島を埋めている山塊が重り合って拡っており、その果に富士が高く見えていた。そして富士山の左手に駿河湾の一部が望まれた。また東方に眼を向けると、馬飛ばしの筏場の集落が落ち込



写真④　変貌した国士峠

景に恵まれた草原状の峠である（北川光雄）」とあり、井上作品同様、眺望の場としての特色が示されている。

井上作品にたびたび登場する国士峠に佇ち、その眺望を確かめてみたいと思った。平成三十（二〇一八）年九月六日、国士峠に向かった。長野部落をはずれると迂曲する林道である。両側は植林された山で、昼なおほの暗い。峠に着けば展望が開けるにちがいないと期待したのだが、その予測は甘かった。峠も写真④のような杉林に蔽われ展望はおろか、閉塞感すらある。泉鏡花『高野聖』の天生峠越えのような圧迫感である。時の流れの中で「茅場」（萱場）は杉の植林となり、その杉も驚くほどに生長し、展望景観を遮閉するに至ったのである。生活や生業の変容は明らかに景観変化を招くのである。萱葺き屋根が瓦屋根、トタンやスレート葺きになれば屋根萱は不要になり、山焼きも行われなくなる。刈敷が化学肥料に替わり、牛馬の働きが耕耘機や自動車に替われば、ヒグサ場も不要になる。その代替として草山は杉の植林と化し、眺望景観を喪った。のみならず、草山から恵まれていた盆花や秋の七草も得がたくなったのである。こうした時に、作家が書き残してくれた景観描写やムラの民俗が新たな光を放つのである。作家が、消えた景観や民俗の中で育んできたものについても見つめ直してみなければならないのだ。

異郷への架橋とその持続

随筆「私のふるさと」の中に「馬とばし」にかかわる次の文章がある。「競馬を見る楽しさもあったが、私たちを一刻も早くそこへ行き着くために駈けさせたものは、やはりそこが異郷であり、異国であったからである。」（傍点筆者）――してみると、国士峠は異郷・異国との境界だった。そして馬とばしは非日常の行事だった。井上靖の自伝ものに見られる「異郷」「異国」「他国」といった表現には注目する必要がある。先に引いた『しろばんば』の文章では南伊豆・賀茂郡を「他国」としており、他国との境は「天城ずいどう」である。次の文章も重要である。「馬車が走り出すと、背後の踏台に乗ったり、窓にぶら下がったりして、隣部落の橋のところまで行った。そしてそこにある橋を渡りきると、馬車から飛び降りた。橋の向うは、私たちにはもはや異郷の感じであった。馬車にはめったに乗れなかった。一年に二、三回、馬車でOという部落へ行くことがあったが、私たちは軽便鉄道が通じているというだけのことで、そのOという部落を尊敬した。Oという部落へ馬車がはいると、心が自然に緊張し、その部落の子供たちの誰もが、活撥で怜悧に見えた。道で彼等に会うと、何となく気が退けて、俯向くようにして、こそこそと歩いた」（「少年」傍点筆者）。

異郷意識を抱かせ高揚させるのは、山・川・峠・橋・トンネル・海峡などといった地形環境やそれにかかわる設備などであることが多い。そうした境界的な場は絶対的なものではない。それは年齢や、人の立場、心理状態などによって層序的であり、波紋状に流動する。

写真⑤　湯ヶ島・市山を結ぶ簀子橋

である。湯ヶ島・市山の間はまさに指呼の間であるのだが、両者を結ぶ橋は少年にとっては異郷を意識させるものだったのだ。しかし、その少年が、青年になればその意識は薄くなり、やがて消えてゆく。

「少年」引用文中のOは大仁のことだと思われる。軽便鉄道の発着するOは少年にとって異郷であり、気遅れを感じさせる地であった。これも長ずれば変哲もない場の一つとなり、かすかな思い出の地となる。少年期の異郷への憧れ、都会への憧れや気遅れはやがて波紋状に遠のくにせよ、成長過程でより多くの異郷意識や憧れ、時に気遅れや刺激を受けるほど人の内面は豊かになるはずだ。憧憬も気遅れも、次なる思考や行動の発条になる。

井上靖は西域に強い憧れと執着を抱き続け、『敦煌』「楼蘭」「洪水」「異域の人」「漆胡樽」など、強く心を動かす「西域物」と呼ばれる作品群を創出した。山本健吉は『楼蘭』（新潮文庫版）の解説の冒頭で次のように述べている。「西域物を主とする氏の大陸物には、氏が若いころから胸の中につちかった夢が託されてい

例えば、「馬車」の節で引いた「湯ヶ島」での隣部落との境の橋と「少年」でも描かれた橋は、湯ヶ島と隣部落市山との間を流れる長野川に架けられた「簀子橋」のことだと思われる。写真⑤は市山側から湯ヶ島を望む簀子橋であり、写真⑥はその下を流れる長野川

写真⑥　湯ヶ島と市山を分つ長野川

る。氏は高等学校の学生時代から西域関係の旅行記を読み出し、それは今まで続いているという。」――指摘の通りだと思う。しかし、その土壌には作家が少年時代から抱き続けた「異郷憧憬」「異域が誘引するものへの感応」「異域探求のこころ」などがあったこともたしかであろう。そして、それらには馬車や馬がかかわっていたのである。

軍馬

井上靖は昭和十二（一九三七）年九月、名古屋第三師団野砲兵第三連隊輜重兵中隊の一員として中国北部に出征している。輜重兵とは、軍隊が必要とする兵器・糧食・被服などの運搬に当たる兵士である。そのため、馬を使うことが多かった。とりわけ野砲にかかわる場合に、馬の力は欠くことができなかった。

『幼き日のこと』の中に、「暁闇」という靖の好む未明の時刻について述べた部分がある。そこに馬が登場する。「大陸の野戦においては、部隊の出動は大抵暁闇を衝いて行われた。私は輜重兵で馬をひいていたので、馬といっしょに歩いた暁の闇は、今になると懐しいものである。兵も、馬も、暁の闇の中を半分眠りながら歩いて行く。河北省の永定河を渡ったのも暁闇の中なら、保定城外を進発して行ったのも暁闇の中である」――。ここでは馬とのかかわりが比較的穏やかに描かれているのだが、馬との厳しい緊張関係が記されたものもある。

「井上靖未発表資料2　行軍開始まで――「中国行軍日記」補遺」（『伝書鳩』第十一号・井上靖記念文化財団・二〇一一年）に収載されている馬にかかわる一文がある。昭和十二年十月四日の条にある以下の記述が注目される。「十月四日　夜半十二時突如非常呼集。匪賊の襲撃かと思つて飛起きると、駅に馬を曳きにゆくといふ。匪賊の襲撃の方がまだいい。真暗い駅の構内で、貨車から苦力が一匹づつ馬を引出し、それを否応なしに引張る。生れて始めてだ。馬の総数四百二十五。殆んど総ての人間が怖らく馬は始めてだろー。全人、死物狂の気持だつたろー。真暗い、一寸先もわからぬ道を、黙々と必死に引いたのだ。周囲の人をみてもみんなピーンと怖さに緊張した顔！　顔！　顔！　馬を車輌の間につなぐのも命がけ。乾草を与へ乍ら歩いたこの夜の気持は一生忘れまい。車輌の間につなぎ終ると夜が明けた」――。

戦闘場面ではないが異常な緊張感が伝わってくる。内地で「軍馬御用」として選抜され買いあげられた馬が野砲牽引用軍馬として貨車で運ばれてきたのだ。その馬が、夜間、馬の扱いに不慣れな兵士たちに引きたてられる。馬は音にも、色にも、気配にも敏感で、驚くと暴れる。極めて危険な任務である。井上靖が幼少年時代に馬に向けた眼ざしはやさしかった。馬は憧れを運び、少年を異郷へ運んでくれる存在でもあった。そうした馬の印象がこの夜に激変した。馬から受けた恐怖感は一生忘れがたいものとして刻印された。じつに悲しいことだが、これは戦争という異常な状況下によるものだった。

井上靖が応召した年と同じ年に、同じ連隊、同じ兵科に配属された人から全く偶然に話を聞いたことがあった。それは、静岡県藤枝市横内の石田覚次郎さん（大正二年生まれ）だった。以下は石田さんによる。

――昭和十二年に召集を受け、同十四年に帰還した。配属は、名古屋第三師団野砲兵第三連隊付兵站輜隊幸村部隊で、中国大陸を転戦した。石田さんの所属した隊は駄馬引きだった。車輌を牽引するのではなく、馬の背に荷駄をつけて運搬したのである。一箇中隊三五〇頭の駄馬が配属されていたのだが、そのすべての馬は長野県下から集められた在来馬、木曾馬だった。木曾馬は、体は小さいが担駄力、脚力が強く蹄も丈夫で、難路や長距離歩行に優れた力を発揮した。米一俵を二斗ずつ振り分けにして長距離を歩かせた。こうした木曾馬部隊の中では将校の乗る少数の西洋馬は異様に大きく感じられた――。

野砲は口径七五～一〇五ミリ、重砲は一〇〇ミリ以上、一五〇ミリにまで及んだ。野砲や重砲を牽引したのは当然のことながら馬力の強い大型の西洋馬だった。井上靖が夜間強い緊張感を以って扱った馬は野砲を牽引し、時に輜重車を引くための大型西洋馬だった。

井上靖未発表資料紹介

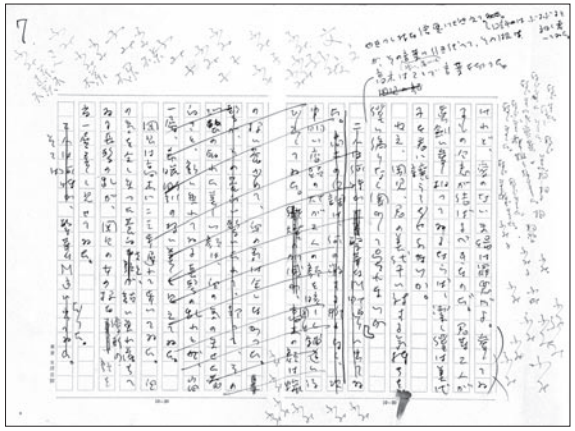
草稿「復讐」

本誌第十～十二号にかけて連載しておりました「井上靖未発表資料」は、分量が少なく発表の場を得にくい資料を順次紹介していくものでしたが、監修・解説をお引き受けいただいた曾根博義氏の体調不良・ご逝去に伴い中断しておりました。現在、別府大学の高木伸幸氏にご協力いただき、連載再開の準備をしております。

本号では、連載再開の前段階として、二〇一九年一月に刊行予定の『井上靖 未発表初期短篇集』（高木伸幸編、七月社刊、小説六篇と戯曲一篇を収録）の中から、一篇を掲載いたします。

本作品は、新潮社版『井上靖全集』編集の過程で井上家から発見された未発表草稿群（世田谷文学館図録『井上靖展』において曾根博義氏が紹介。現在は県立神奈川近代文学館所蔵）の一つで、昭和七～八年に執筆されたものと推定されます。原稿用紙十九枚、ペン書きの本文に朱の直しが多く入っています。江戸川乱歩などを想起させる、いわゆる「探偵小説」で、井上靖の文壇デビュー前の試行錯誤が窺える興味深い作品です。

原文は旧漢字・旧仮名遣いですが、掲載にあたって新漢字・新仮名遣いに改め、振り仮名も読みやすさを考え多めに振りました。詳しい情報や内容についての解説は、『井上靖 未発表初期短篇集』をお待ち下さい。



草稿７枚目。原稿用紙の欄外に、「ふみ子」「ふみ様」などの書き込みが残されている

復讐

京塚承三

「話と言うのは他じゃあない。美代子の事についてだが……」

高木は斯う云うと、一寸、立ち止って、新しい両切煙草に火をつけ乍ら、探る様にジロリと鋭い視線を岡見謙介に投げつけた。

「えっ！　奥さんについて？」

岡見の顔色はさっと青ざめて、その語尾の震えは明かに内心の動揺を表わしていた。

六月とは言え、北国の事とて、宵の舗道はまだ薄ら寒かった。二人は明い鈴蘭燈の灯っている街を、疎らな人波を縫うて、ゆっくりと歩いていた。

「あはははは、君、何も今更、改めて驚くにもあたるまいよ。話はそろそろ、かび臭い古典の部類に入りかけている代物なんだからね。それを、今夜、僕は事新しく、持ち出そうと云うんだ。この僕の立場こそ、実にお恥しい次第だよ。ここまでくれば、もう悲劇以上の喜劇さ。ねえ、そうじゃあないか！　五年と云う月日は随分長い、その五年の間、自分には爪の垢程の愛情も持っていない妻を、自分を愛していてくれるものだと許り信じ込んでいたお人よし、おまけに、他人の子供を自分の子供だと許り思い込んで一生懸命に育てて来た愚鈍さ――自分乍らも、つくづくと愛想がつきて終ったよ。ねえ！　岡見！　ここまで言ったら君も、今夜の話の大体の見当はついたと思うんだが」

「おい、何とか一言位、挨拶してもよかろうじゃあないか。僕もまだ血の通っている男なんだ」

力なく振りかえった岡見の顔は、絶望と慚愧と苦悩を一緒くたにした様な、何とも名状できない表情で、ぬりつぶされていた。何か云おうと口をもぐもぐさせていたが、軈て、再びうなだれてよろめく様に歩き出した。高木は立止って、威嚇する様にぐっときめつけた。そして、一寸間をおいて、

「あっはははは。是は冗談さ。俺等はお互にもう三十の声もきいたし、不幸にも教養も持っているインテリ

である以上、まさか、痴情の果の刃傷沙汰でもあるまいからな。

然し、兎に角、僕と君と美代子と、あのまだ頑是ない瑛子の――四人の幸不幸に関する問題にはちがいない。相当に審重に考えなければならないと思うんだ。で、僕は君の偽らない気持ちを此場合、判然りと聞いてみたいのだ。そして紳士的に此問題を解決しようじゃあないか。

その前に、一応、僕がこのドラマに於ける自分の配役を――つまりピエロの役割さ、それを如何にして認識したか、参考までにお話しておこうかね。

君もご存知の様に、僕はここ数年と云うものは、兎角、健康が勝れなかった。どこが悪いと云うわけではないが、どうも体の調子がはかばかしくないんだ。で、一つ精密に健康診断をしてもらってみようかと、五日程前、近くの若い医者の所に行ったのだ。この健康診断は、僕にとっては、意外にも恐ろしい人生診断だったよ。血液検査が終った時、『お子様には御縁がないでしょうなあ』とその医者が云うのだ。学生時代に受けた性病が原因で、それ以来、僕からは子供を作る能力は永遠に取り去られて終っていると云うのだ。僕はこの言葉を最初聞いた時、思わず吹き出して終ったものだ。僕は現に妻の美代子との間に、瑛子と云う四才の子供を持っているじゃあないか！『御笑談でしょう』と云った調子で僕はその若い医学士に笑い乍ら反駁したものさ。所が相手は執拗に自分の診断の正確と科学の絶対を、主張するのだ。話が話だけに僕は最后に、とうとう、その若い医学士と喧嘩して飛び出して終ったよ。

頭から、そんな事は信じはしなかったものの、矢張り、なんとなく気懸りだった。それで、も一人の医者に診察してもらったんだ。するとその結果も前と同じ事だ。その医者は気の毒そうに、お子様はおあきらめなさるですなあ、と云うのだ。さあ、こうなるともう笑い事ではない。喧嘩どころではない。とうとう帝大のR博士の診察を死ぬ様な思いで受けに行ったのだ。R博士は斯界の権威だからね。その結果は、今度こそ、完全に僕をKOしたよ。十年前から、僕の生殖能力は喪失していると云うのだ。

ねえ、君、その時の僕の気持を想像してみ給え。美代子は僕の最愛の妻だ。瑛子は、何物にも代え難い僕の愛児だ。この二つが僕の生存の原動力だったからね。

僕はR博士の言葉程、今迄に恐しい言葉を聞いた事はなかったよ。死刑の宣告を受けた囚人でも、その時の僕程みじめではないにちがいないよ。美代子と瑛子の二人ともを、僕は、その時に同時に失って終ったのさ。

美代子の不貞と、瑛子は自分の子でないと云う事実を、その時の僕は否応なしに承認させられて終ったのだ。

僕は十年も老いふけて、恥と悲しみと憤りで、半狂いになって帝大病院の門を出たのだ。

それから今日迄の五日間の生活は、御想像に任せるとしよう。

では一体、瑛子の父は誰だ？この問題はさして六難しい問題ではなかったよ。僕の家に殆ど家族の一員の様に絶えず出入する男、僕の最信じきっている男、妻の趣味とぴったり合う趣味を持っている男、――勿論、君より他に考え得る男はないからね。おまけに、あの瑛子の顔が君に生き写しであると云う事を、愚かにも僕はどうして今迄、気付かなかっただろう！

僕の驚愕と悲嘆は甚だ大きかった。然し、それに伴う憤怒は、さして大きなものではなかった。それは余りに自分の錯誤が大きかったので、怒るにも怒れないと云う所かも知れないね。

僕は自分でも不思議な位、穏かな口調で、妻に一切の事を尋ねたよ。そしたら、美代子は泣き乍ら、それでも案外すなおに、総ての事を打明けてくれた。そして、美代子は、矢張、心から、君を愛していると云うのだ。

で、今度は君の気持ちを、偽りのない所を承り度いのだ。人道主義者の言い草ではないけれど、愛のない夫婦は罪悪だよ。愛しているもの同志が結ばるべきなのだ。君等二人が真剣に愛し相っているならば、潔く僕は美代子を君に譲ろうじゃあないか。

ねえ、岡見、君の美代子に対する気持ちを僕に偽り

なく聞かして呉れないか」
高木はここで言葉を切った。
が、その冷い、落ついた言葉に引き代えて、その眼は、やきつく様な憎悪に燃えて口許はぶるぶると細く震えていた。
岡見は高木に二三歩遅れて歩いていた。血の気を全く失った蒼白さと、額に垂れ落ちている長髪の乱が、岡見の女の様な優形の顔を尚一層美しく見せていた。
そこは、繁華なM道だった。
店頭の明い灯と、春宵のそぞろ歩きの人波のざわめきは二人の会話にはそぐわない雰囲気を醸し出していた。
二人は暫く黙って、華やかな人の流れに沿って歩いて行った。
突然、高木が立止ってしんみりした口吻で云った。
「この飾窓の装飾はどう思う？　是は僕の制作だよ。ひとつ、何時もの様に君の批評を承ろうか。よく君から批評を聞いたものだ。然し、店頭装飾師高木と、画家岡見謙介との十年の友情も、どうやら今夜が最後であるらしいからね。あっははは」
それはR百貨店の前だった。二間四方もあるかと思われる大硝子が鏡の様に綺麗に磨かれている飾窓の前に、三組許りの夫婦連れが中を覗いて立っていた。
「是は僕の新しい試みだよ。所謂断裁美学と云う奴を地でいったのさ。ごてごてと並べ立て、ごてごてと飾り付ける従来の方法を棄てて、思い切り、無雑作に投げ出して、単純の美を覗ったものさ。
ね、ほら、あの二つの人形だって、一寸、変っているだろう。完全な一ケの人形に、帽子と服と靴とハンドバッグを持たせる代りに、僕は思いきって、ああバラバラにして、投出してみたものだ。然し、それでいて、こうしてみると矢張り、一ケの人形としての統一とリズムはちゃんと、取れているだろう。どこも不自然な所は眼につかないだろう。ね、岡見、そう沈み込まないで、何時もの様に批評してくれないか」
成程、それは眼新しい飾窓の装飾だった。中央に、女と子供の絹靴下をはいた四本の足が少し斜めに並べられてあった。丁度、レビューガールが、ぽんと軽く跳ねあげた美しい足の様であった。そして、その傍に宙に吊された人形の胴体に水色の婦人用のドレスと、女の子供服が、ふんわりとかけられて、それが足の所まで美しく垂れていた。そしてその衣服の斜上の方に、一つの隅置が置かれてあって、その上に、婦人帽と、少女帽子が、二尺程の高低の差をおいて、一直線に縦に並べられてあった。
硝子越しにみる通行人の眼には、それが何の不自然にも見えなかった。足をポンと軽く跳ね上げた洋服の婦人が、是も同じ様にポンと足を跳ね上げた女の子供を連れて散歩しているのだ。
そして、それが蒼い光線をあびている。そして、そのバックには、リボンで「初春の贈り物」とかかれた大きな装飾字体が六字浮んでいる。よその方々の賑やかな明い飾窓に引代えて、それは、寂しい程、簡単な飾り付けであった。が、どこかにそぞろ歩きの人間の足を止らせるに足るだけの静かな美しさがあった。
「あののびきった四本の足は、こうしてみると、土で作った奴には見えないじゃあないか。さわれば柔かく凹みそうだよ。あの二つの胴体だって、あのドレスを少と持ち上げている乳のふくらみなどは、全く人形とは思われないね。この飾り付けには僕も相当、努力した事はしたが、要するに、あんなすばらしい材料があったから成功したんだよ。ねえ岡見、まるでほんとの人間の胴体とほんとの人間の足みたいじゃあないか！」
岡見は空虚な眼で高木の声を聞き乍ら明い飾窓をぼんやり眺めていた。然し、彼の網膜には何も映らなかったにちがいない。その顔は苦悩にゆがんで、その唇からは苦しそうなと息がもれていた。
二人はそれから、どっちからとなく歩き出した。そして足は、何時か、M道を右に折れて、海浜公園の方へ向いていた。
「高木、許して呉れ。僕は美代子さんを愛している」
岡見ははじめて、その顔に悲壮な決意を浮べて斯う言った。
「ずっと愛して来た。そして今でも愛している。僕にとっても、美代子さんにとっても、この恋は業だ。恐

ろしい業だった。罪を犯し、その罪に怯えながらも、どうする事も出来ないのだ。打明けよう、打明けて裁を待とう――そう幾度決心したか知れない。然し、僕等二人はそれが出来なかったのだ。君の僕にかけている絶対の信頼と、君の何の屈たくもない幸福な笑顔をみると、何時も、その勇気が挫けて終ったのだ」

「あはははは。君が僕に何も打明けなかったのはせめてもの友情だよ。君が僕に示したたった一つの友情として感謝するよ。〝私が殺した男〟と云う映画があったね。あの主人公が自分が殺した男の父母にそれを打明け得なかった様にか！　あっははははは。いや、どうもあっははははは」

「何もかも、とうとう来る所まで来て終った。僕は潔く、君の制裁を受ける。どんな制裁でも」

岡見は呻く様に斯う云って高木をみつめた。

「制裁？　ふうん、制裁とは君らしい考え方だね。然し、傷ついた僕が君をたとえ殺した所で、僕の傷は、決してなおりはしないからね。君を制裁しようなんて僕は夢にも考えていないよ。

岡見、ねえ、どうだ。それより此の人生の悲喜劇を一つナンセンスで結末づけ様じゃあないか」

「ナンセンス⁉」

「そうだ。ほら、あそこに地方巡りの興行師の張っている見世物がかかっているだろう。

僕等のお交際も今夜限りだ。僕等はあのインチキな見世物を見物して、右と左にお別れしようじゃあないか。人生なんて、みんな見世物同様インチキだよ。口笛でも吹いて、お互い、朗らかに別れようよ。美代子と瑛子はよろしくお願するよ」

場末の下町の空地に、見世物小屋がかかっていた。安っぽい赤や青の絵具でかかれた不気味な、女の生首の絵が幾枚も掲げられていた。そしてその前に、大勢の群衆が珍しそうに立ち塞っていた。

「さあ、入った。入った。ゾロリと並んだ女の生首、口も聞けば唄も唄う。世にも不思議な生首の晩餐会」

台の上でむちを持った眉見に傷のある浅黒い男が声をからして号んでいる。

高木は先に立って、つかつかと入っていった。岡見

も仕方なく、それに続いていった。

丸太を縄で緊った、極くお粗末な小屋がけで、それを所々破れかかった天幕で、覆ってあった。

田舎のお祭りの様な臭いと、古井戸の底の様な、不気味な冷さが、そこには漂っていた。

竹で四角に仕切って、その中に、粗末な舞台が出来ていて、なるほど、ビール箱みたいな六ツの台の上には各々髪をふり乱した、物凄い形装をした生首が六ツ置かれてあった。白粉のはげかかった顔を時々凹めて、眼を細くあけて見物人をみているものもある。又神妙に、眼をつぶっているものもあった。そしてその所の仕切りの外に大勢の子供や、お内儀さんや、子僧さんや娘さん等が二十人程、気味悪そうに覗いていた。

「お菊さあん」入口の親父の節のついた呼声に、

「あーい」と一番右の女の首が、黄色い返事をした。

キャッと、見物人の女子供が悲鳴をあげた。光の全反射を応用して、その首から下を観客の視力に入れない、あの昔からあるありふれたカラクリの見世物の一種だった。

二人は黙って、女子供の後からそれを覗いていた。

「お露さあん、安来節でも唄ってお客さま方に聞かせておあげ」

すると、今度は一番左の生首が、微かに眼を開いて、栄養不良の様な声を張り上げて唄い出すのだった。

「出よう」

「うん、でも一寸、うまくできてるじゃあないか！子供や女の恐るのも無理はないね、あっははは」

二人は、そこを出て、又歩き出した。

そして、五分許りの後に、二人は海浜公園の薄暗いベンチに腰かけていた。

「岡見、今夜の贈り物は確かに受取って呉れたろうね」

突然、斯う高木がニヤニヤと薄気味悪く笑い乍ら、云った。

「えっ？　贈り物？」

「そうだ。美代子と瑛子の事さ」

岡見は、不気味な不安を感じてか、ぶるっと身を震わした。

「あっははは、今夜、僕は美代子と瑛子を君にお目にかけた積りだよ。百貨店の装飾と、さっきの見世物小屋でね」
「えっ！」
と言って、岡見はベンチから立上った。
「そう、驚いても始らないよ。まあ、腰かけ給え」
「そ、そんな、ばかな！　驚かすのはよして呉れ給え」
「あはははは。僕は御承知だろうが店頭装飾が職業だよ。妻と子供の、足と胴体位、飾窓にかざるのは朝食前の仕事だよ。屍体には、死後硬直と云う結構な現象があるからね。
それにねえ、岡見。二三百円の現金をつかまされば、興行師なんて奴は、どんな事でもするからね。君は、あの六つ並んだ生首の中の真中の二つを、よく見たか？　その二つが美代子と瑛子の生首だったとしたら……。
人間と云う動物はおかしなものさ。生首だと云って、差し出したら、誰も生首だとは思わないものだよ。成程、よく出来てる、って云って、感心するだけの話だよ。あっははは。
君は御存じかどうか知らないが、真中の二つ、あの女と子供の二つの生首、あれは、まさか、歌も唄わなかったし、あーいなんて、とんきょうな返事もしなかったからねえ、あっははは、あっははは。さあ、是で、僕は思い残す事はないよ」
と、言い終ると一緒に、轟然と銃声が上って、高木の体が前に崩れた。
唖っと言ったままで、驚愕の余り、岡見は何時迄も立ちすくんでいた。
それからどれだけたったか。
「とうとう、自殺したんだ」
斯う、呻き乍ら、岡見は、ピストルを拾い上げて、失神した男の様にフラフラと歩き出した。
その翌日の新聞には、R百貨店の前での、無名の画家岡見謙介の短銃自殺を報道してあった。然し、海浜公園に於ける高木の死は報道されてなかった。それもその筈である。岡見謙介の自殺の報道記事の掲載されている新聞を、ニヤリと薄気味悪い微笑を洩し乍ら、或喫茶店で読んでいた男は海浜公園で自殺した筈の高木亮介であった。

× × × × × ×

以上の一篇の奇怪な物語とは、私が、新宿の裏通りの小ぽけな酒場で、或夜更高木と云う男から聞いた一篇の立ち話を小説風に書き代えたものである。その高木と云う男は、私が此世で逢った男の中で、一番、陰惨な暗い面を持っていた男だった。最後に、その時高木が附加えた言葉をそのまま、ここに記しておこう。
「私は、画家岡見謙介の持つ、繊細な病的とも思われる位弱々しい触覚と、天性の神経質を、巧妙に利用したのですよ。生首も、飾窓の中の胴体も、足も、みんな、私のその場で不図、浮んできたでたらめですよ。
岡見は、私の計画通り、私の言葉の総てを信じて、罪の恐怖と、愛人を失った絶望と、陰惨な恐怖心とのために、自殺したのですよ。
私は、私の手を下さないで、見事に彼を殺しましたよ。ピンからキリまでの、お芝居で、岡見謙介を殺しましたよ。
私は見事に復讐しましたよ。あっははは。
え、美代子と瑛子ですか。岡見が自殺した、その翌日、私は二人を残して家を飛び出しましたよ。今頃、どうしていますか？　時々、夢にみますよ。私は、今でも矢張り、美代子を愛しているんですよ。そして、瑛子も自分の子供の様に愛していますよ」
斯う語って、高木は陰惨な顔を凹めて、寂しそうに笑った。

世田谷の家

浦城義明（TBSテレビ勤務・井上靖孫）

井上家というと文字通り世田谷の「家」を思い浮かべる人も多いのではないでしょうか。そこは靖がいてふみがいて、家族だけではなくいつも多くの人が集った、井上家の象徴のような場所でした。家自体は七年前に解体されてしまいましたが、祖父母を思いだす時、その背景には居間の食卓だったり、お正月の応接間だったりと、今でも「世田谷の家」の風景がくっきりと浮かんできます。

井上家が大井滝王子から当時の世田谷四丁目（現・桜三丁目）に引っ越してきたのが、昭和三二年（一九五七）一二月。祖父が五〇歳の時でした。前年から朝日新聞で「氷壁」を連載して超多忙であった祖父に代わり、祖母がこの土地を見つけてきたそうです。後年この世田谷の家に私自身も住むことになるのですが、世田谷通りの喧騒から程近く、決して閑静な高級住宅地ではありませんでした。少し離れたところには成城や田園調布といった文学者が多く住む落ち着いた住宅地があります。祖母にどうしてここを選んだのかを聞いたことがありますが、いわゆる〝高級〟住宅地に住もうなどという気持ちは全くなかったようでした。「近くに雑木林があって環境が良かったのと、まとまった広さの土地だったのですぐに決めた」というようなことを言っていました。雑木林はとうの昔に無くなっていましたが、それでも祖母はこの場所をとても気に入っていたのです。ただ利便性の点では最寄り駅からかなり遠く、来客者の多くはタクシーやバスを乗り

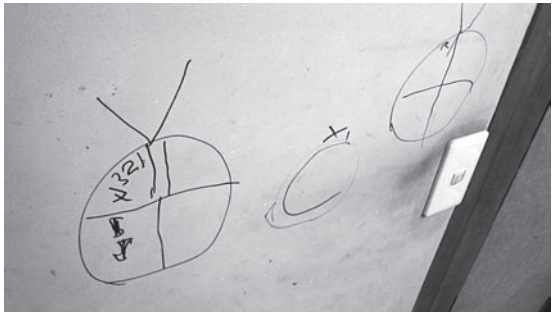
庭から眺めた世田谷の家。写真左端に修一叔父の家が見える
（2010年2月筆者撮影、写真は以下すべて同じ）

継いで訪問していました。もっとも祖母には〝駅近〟という発想はなく、五〇年以上住んでいて、最寄り駅を利用したことはほとんどなかったのではないでしょうか。

三四〇坪の広い土地に、祖父の沼津中学の同級生であった磯山正さんの設計で建てられた世田谷の家ですが、早くもその八年後には増改築を余儀なくされました。祖父の作家としての名声の高まりとともに来客が増え、応接間が狭くなったのです。

私自身の記憶に世田谷の家がはっきりと登場してくるのは、小学生になった頃（昭和四八年）からです。母から「世田谷に行きますよ」と告げられると、子ども心にとてもわくわくした気持ちになりました。〝世田谷＝ごちそうが食べられる〟、ということもありましたが、何よりそこはいつもの生活とは明らかに違う非日常的な空間だったのです。到着すると祖父母への挨拶もそこそこに、大抵すぐに家の中を見て回ります。実にいろいろな部屋がありました。一番のお気に入りは「二階の納戸」。両壁備え付けの書棚には祖父の増

二階の納戸。奥の小さな扉が屋根裏部屋に通じている



子供時代の筆者の落書き。家が解体されるまで残っていた

屋根裏部屋につながります。そこは絵画や壺など大切なお宝が収納されているまさに秘密部屋。中は薄暗く怖ろしげな雰囲気が漂っています。子どもたちが集まるとよく「かくれん坊」をしましたが、この暗い屋根裏部屋だけは誰も一人で隠れる度胸はありませんでした。秘密部屋は他にも、祖父の書斎の襖（ふすま）を引くと現れる書庫がありましたが、ここは気軽に入れる場所ではなかったのです。

一階の西側、「ミシンの部屋」もお楽しみの部屋でした。かつては住み込みのお手伝いさんが使っていましたが、古い足踏みミシンが置いてあったので、皆そう呼んでいました。この部屋には、毎日のように祖父宛てに送られてくる書籍類の中で、不要なものが積まれていました。つまり、ここにある書籍は好きに持っていって構わなかったのです。今に刷された文庫本や翻訳本、他にも記事が掲載された雑誌や資料などが古本屋のようにぎっしりと並べられていました。そこでよく読んでいたのが古い雑誌類。中から若い頃の祖父の写真が出てきたり、当時の世相記事など読んでいると飽きることはありませんでした。さらに奥の小さな扉を開けると背の丈もないくらいの

して思えば、このフリーマーケットのようなミシンの部屋の存在は、私の自己形成にとても大きな影響を与えてくれたと思います。活字好きに育ったのは、間違いなくこの部屋から持ち出した多くの本のおかげです。大人が読むような週刊誌を自由に手に取ることができ、いろいろな作家の新刊本を読みました。小学生の時から思う存分本に触れる環境があったことに感謝しなければなりません。このように世田谷の家は、子どもの好奇心を満たしてくれる場所でした。

大学時代になると、祖父母が旅行などで家を空ける時は、いつも暇な私が泊りの留守番役を頼まれました。そういったこともあり、一人でよく世田谷の家に遊びに行っていました。ちょうど『新潮』で「孔子」の連載が始まった頃（昭和六二年）です。孔子の話はそれこそ小学生の頃から聞かされていましたが、ようやく書き始めたのです。祖父の連載小説をリアルタイムで読むのは初めてでした。かなり難解でしたので、世の中には受け入れられないのではと思っていました。しかし単行本が発売されるや、世間で孔子ブームが起き、その年を代表する大ベストセラーとなったのです。文壇の要職に就き、幅広く活躍していた晩年の祖父しか知らなかったのですが、この「孔子」で小説家としての、祖父の凄さを目の当たりにしました。しかし、これが最後の小説となりました。

平成三年（一九九一）一月に祖父が亡くなりました。その後間もなく、私が用心棒として祖母と世田谷の家で同居することになります。社会人二年目の時でした。当初は数か月くらいの気持ちで引き受けたのですが、結局結婚するまで六年余り、二階の旧卓也（靖次男）部屋を使っていました。

広い家での二人暮らしは思いのほか静かでした。毎日祖母の話をのんびり聞いていると、いつも賑やかで非日常的な空間に見えた世田谷の家が、そうでもないことがわかりました。夜になると虫の音（ね）が聞こえ、家中どこにいても気持ちの良い風が入ってきます。来客が帰った後、祖父と祖母もこうした二人きりの静かな時間を過ごしていたのでしょうか。庭の白梅は、祖父が書いた文章にあるように毎春立派な花をつけました。

暮らしてみると、世田谷の家に訪れるごく普通の日常の営みがとても居心地よく感じられました。

書斎もそのままに、机の上に原稿用紙や万年筆が置いてありました。生前はあまり立ち入ることのなかった書斎ですが、中に入ると祖父と接したときの緊張感が蘇ってきます。この部屋で、この机に向かってどんなことを考えながら執筆をしていたのだろうかと思いを巡らせていると、無性に祖父が書いた小説を読みたくなりました。これまで何となく読むことを避けてきたのですが、沸き起こる気持ちのまま「二階の納戸」にある本を片っ端から読んでいきました。この時期がなければ、改めて祖父の本を読むことはその後なかったかもしれません。

家の主が祖父から祖母に代わった世田谷の家に少し変化が訪れました。まず書庫が建っていた庭の東、九〇坪ほどの土地を相続税の関係で手離しました。そして、祖母の家庭菜園が本格化し、畑がどんどん拡大していきました。庭が少し狭くなったのです。庭の住人・犬のチャコにとっては災難だったかもしれません。その後、南西部分には修一叔父の家も建ちました。しかしそれでもまだ十分な広さでした。祖母がこの土地を購入する決め手とした「まとまった土地」というのは、まさに慧眼だったのです。

平成二〇年（二〇〇八）一〇月。ふみ危篤の報を受け、世田谷の家に集まった子ども、孫、曾孫ら大勢に見守られる中、祖母は息を引き取りました。九十八歳でした。ついに世田谷の家の主がいなくなりました。半世紀の間、住人の入れ替わりはあれど、祖父母にとってはこの世田谷の家が終の棲家となりました。その四年後、祖父の出生地である旭川市の井上靖記念館に応接間と書斎が移築されました。「世田谷の家」は井上家の手を離れたものの、幸せなことに当時のまま保存され、一般に公開されることになったのです。

昨年の夏、家族で井上靖記念館を訪ねました。そこには、当時と同じ絨毯、同じソファ、よく見た小物が置かれた応接間がありました。慣れ親しんだ部屋がこうして展示されていることに、少し不思議な感じがしました。子どもたちはただ豪華な応接間に驚いていたようです。私はかつて過ごした世田谷の家でのいろいろな場面を思い出していました。そんなとき、ふいに説明し難い空気のようなものを感じました。郷愁とは違う、何か懐かしい感情。それはおそらく小さい頃から、そして大人になって住んでいた時もずっと感じていたものです。遠く離れた旭川の「世田谷の家」で、しばらく忘れていたこの得も言われぬ感覚を思い出したのです。

いま、この原稿を書いていて、その正体が少しわかる気がします。それは祖父母に対する絶対的な「安心感」のようなものではなかったかと。祖父母からの愛情を受け、それに対して安心感を抱く。小さい頃から世田谷の家に行くと、無意識に感じていた心地良い空気の正体です。世田谷の家には、祖父母と孫の間にそんな温かい空気が流れていました。

「世田谷の家」の一番の思い出といえば、この空気のような安らぎということになるのでしょうか。

世田谷の家の居間。奥は仏間だが祖母が使っており、寝るのもこの部屋だった

平成二十九年度

事業報告

理事長　井上修一

本財団と旭川市の間で平成二十八年に締結された「井上靖記念事業の実施に関する協定」に従い、平成二十九年度も財団が事業に必要な経費を負担し、旭川市の「井上靖記念事業実行委員会」の協力を得て第二回「井上靖記念文化賞」をはじめ、左記の諸々の文化事業を運営・実施いたしました。

（一）井上靖を記念する文化賞

第二回井上靖記念文化賞は、平成二十九年十月十六日から報道機関及び文化芸術団体等に候補者の推薦を依頼し、平成三十年二月十七日に開催した選考委員会において、東京大学名誉教授の芳賀徹氏を井上靖記念文化賞に、また東海大学名誉教授の織田憲嗣氏を特別賞に決定いたしました。

贈賞理由は、芳賀氏が「近世・近代に於ける文学美術等の魅力の探求と紹介に寄与したことに対して」、織田氏が「椅子と暮らしのデザイン研究、家具産業の振興及び後進の育成への寄与に対して」です。

贈呈式ならびに祝賀会は、平成三十年五月十九日にアートホテル旭川にて行われました。賞の選考が二十九年度、贈呈が三十年度と年度をまたいでいますが、旭川市の冬期の気候を考慮した結果です。

（二）国内外における日本文化の研究助成

○国内

井上靖文学の研究団体である「井上靖研究会」に研究誌『井上靖研究』の刊行助成を行うとともに、ホームページ管理の助成を行いました。

また、静岡県伊豆市の「井上靖ふるさと会」が、井上靖生誕一一〇周年を記念して実施した『教科書で読んだ井上靖』出版事業に対する助成を行いました。

○オーストラリア・ニュージーランド

平成十八年に、オーストラリア・ニュージーランドにおける日本文学の研究奨励のため、シドニー大学に設立した「井上靖賞」は、今年度で第十一回となりました。選考はシドニー大学の井上靖賞選考委員会にお願いしてあります。「源氏物語」の全巻英訳者であり、「平家物語」の翻訳者としても知られ、日本の旭日大綬章も受章している、オーストラリア国立大学名誉教授ロイヤル・タイラー（Royall Tyler）氏が受賞しました。平成二十九年十月二十日、シドニー大学・井上靖記念文化財団・井上靖記念事業実行委員会・ＮＳＷ豪日協会の共催で、シドニー大学のオウディトリウム・チャールズ・パーキンズ・センターにて贈呈式が行われました。また「井上靖賞」贈呈式で受賞者の講演の後に、文化プログラムとして「源氏物語絵巻」に関するイラストなどが紹介されました。

ロイヤル・タイラー氏（右端）と「井上靖賞」関係者

○ベトナム

ベトナムにおける日本文学、文化の研究振興のため、平成二十七年度に、国際交流基金ベトナム日本文化交流センターと共同で開始した「井上靖賞　日本文学研究論文コンテスト」は、今年度が第三回になりますが、

応募論文が少なかったため、応募締め切りを平成三十年四月に延期しました。したがってご報告は来年度になります。

また井上靖作品のベトナム語翻訳出版助成に関しても、平成二十九年度は該当作がありませんでした。

(三) 井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

○本財団ホームページ
更新と管理をしました。

○井上靖記念館（旭川市）
平成二十九年七月十五日、『旭川市井上靖記念館報』第十七号の発行に協賛。
常設展示の他に、左記のような企画展を四回、本財団と共催で開催し、企画展の見どころの紹介や解説のための「井上靖講座」も併催しました。
平成二十九年四月十五日～七月九日、第一回企画展「生誕一一〇年記念　井上靖――愛蔵品展」。五月十三日、「井上靖講座」。
平成二十九年七月十五日～十月九日、第二回企画展「井上靖　人と文学Ⅷ――ローマオリンピック取材と欧州旅行」。
平成二十九年十月十四日～三十年一月二十八日、第三回企画展「色紙にみる井上靖の世界」。一月十三日、「井上靖講座」。
平成三十年二月三日～四月八日、第四回企画展「収蔵品展――井上靖の足跡を辿る」。三月十七日、「井上靖講座」。

○日南町美術館
展示資料寄託契約のもとに常設資料展示に協力しました。

○井上靖文学館（長泉町）
常設展示の他に左記の二つの企画展を本財団の後援で開催しました。
平成二十九年三月十六日～九月十九日、「五感であそぶ井上靖の世界」展。

平成二十九年九月二十一日～三十年九月二十五日、「教科書で読んだ井上靖」展。
平成二十九年九月二十日、書籍「教科書で読んだ井上靖」出版記念会、企画展内覧会。

(四) 近代文学に関する資料収集・調査研究事業

日本近代文学館との共同事業により、日本近代文学の資料収集に協力しました。
井上靖の資料収集・調査研究を行っている当財団機関誌『伝書鳩』第十八号を十二月に発行しました。

(五) 井上靖に関する講演などの開催

○平成二十九年四月二十九日　伊豆市天城会館
劇団しろばんば主催、伊豆市・伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会・本財団後援、井上靖生誕一一〇周年記念公演「しろばんば～久保田の人々～」

○平成二十九年六月十七日　旭川市井上靖記念館
井上靖生誕一一〇周年記念講演「王子と孤児――小説家井上靖の育てられ方」講師・井上修一（本財団理事長）

○平成二十九年七月二十九日
井上靖研究会の夏季研究会がホテル金沢兼六荘で行われ、本財団からも参加いたしました。
研究発表「井上靖『敦煌』論」楊雯瀟氏（北京外国語大学修士課程在学・別府大学大学院研究生）
特別講演「井上靖先生　思い出すことなど」石原国利氏（登山家・石原商店・スズランクラフト会長）

○平成二十九年九月十六日　旭川市井上靖記念館
井上靖生誕一一〇周年記念講演「父と私」講師・浦城幾世氏（本財団常務理事）

○平成二十九年十月二十二日　長泉町井上靖文学館
講演「祖父・足立文太郎と井上靖のはなし」講師・黒田佳子氏（本財団後援による）

○平成二十九年十二月三日
井上靖研究会の冬季研究会が國學院大學院友会館で行われ、本財団からも参加いたしました。
研究発表「井上靖文学における僧侶像――『僧行賀の涙』から『天平の甍』へ」李鈺氏（新潟大学大学院博士課程後期在学）
研究発表「井上靖文学における子供と植物――生命と女性的なもの」楊逸氏（聖徳大学大学院博士課程前期在学）
研究発表「井上靖の詩学」中嶋一裕氏（クラーク記念国際高等学校教諭）

○平成二十九年十二月十七日
旭川市教育委員会・井上靖記念館・北海道新聞社主催、井上靖記念事業実行委員会共催、本財団後援で第六回「井上靖記念館　青少年エッセーコンクール」が全国の中・高校生を対象に実施されました。募集テーマは「こえ（声）」です。審査員長は吉増剛造氏（詩人）、審査員は平原一良（北海道文学館副理事長）、斉藤佳典（北海道新聞社文化部長）の両氏です。平成二十九年十二月十七日に井上靖記念館にて優秀作品の表彰式が行われました。今回本財団は、「井上靖生誕一一〇周年記念特別賞」の創設を支援し、浦城幾世常務理事が表彰式に出席し、「井上靖生誕一一〇周年記念特別賞」の贈呈を行いました。
最優秀賞
中学の部：宮腰七海「ぼうや」（旭川市立緑ヶ丘中学校二年）、高校の部：佐藤文香「聞こえる声のもつ心の声」（白百合学園高等学校三年）
優秀賞
中学の部：小島怜亜「『声』からはじまる『人』」（立命館慶祥中学校一年）・小林天音「しるし」（立命館慶祥中学校一年）、高校の部：木下未来「私の身近な声」（北海道寿都高等学校二年）・名取大樹「声の力」（北海道東川高等学校三年）
井上靖ナナカマドの会賞
中学の部：石井優璃「私のこえ」（北海道教育大学附属旭川中学校三年）、高校の部：福田大貴「境界線の向こう側にいる僕へ」（北海道旭川永嶺高等学校一年）
井上靖生誕一一〇周年記念特別賞
中学の部：遠藤港音「『こえ』を読む」（筑波大学附属中学校三年）、高校の部：小宮山響「声なき声」（白百合学園高等学校二年）

○平成三十年一月二十八日
「あすなろ忌」井上靖追悼事業が、伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会主催、井上靖文学館（長泉町）・伊豆市・静岡新聞社・静岡放送・本財団などの後援で催されました。伊豆市湯ヶ島熊野山墓地で墓参会、天城会館劇場ホールで井上靖作品読書感想文・感想画コンクール優秀作品の発表と表彰式が行われました。
読書感想文・最優秀賞
小学生の部：丹籐優「友達」（伊豆の国市立大仁小学校六年）、中学生の部：後藤幹奈「きらきらしたものを考える」（筑波大学付属中学校二年）
読書感想文・優秀賞
小学校の部：青木紗璃「私にできること」（天城小学校六年）、中学の部：古川園絢菜「少年目線での世界を感じて」（鎌倉女学院中学校二年）
読書感想文・ふるさと賞
小学生の部：杉山水芳「洪作とおぬいばあさん」（天城小学校五年）、中学校の部：田口季世佳「幼き日のこと」（修善寺中学校一年）
感想画・優秀賞
小学生の部：芹澤結一郎「こらっ」（修善寺南小学校五年）、中学生の部：額田宇札士「鮎太の受験勉強」（修善寺中学校三年）
感想画・ふるさと賞
小学校の部：加藤千采「いざ豊橋へ」（熊坂小学校六年）
また午後には佐藤純子氏（本財団理事）による記念講演「井上靖と中国」が行われました。

（六）特定寄附事業
平成二十九年度においては、特定寄附事業はありませんでした。

（七）その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上靖に関係する次のような催しがありました。

○軽井沢高原文庫
平成二十九年四月二十一日～七月十日、「軽井沢を愛した文学者・芸術家たちスペシャル」展

○諏訪市原田泰治美術館（平成二十九年四月一日～五月三十一日）

○仙北市新潮社記念文学館（平成二十九年四月八日～七月十七日）
両美術館で開催された新潮社創業一二〇周年記念写真展「新潮社写真部のネガ庫から――カメラがみた作家の素顔」において、安土城址でぶらんこに座っている井上靖（五十七歳ごろ）の写真展示

○練馬区立石神井公園ふるさと文化館
平成二十九年四月二十二日～六月十一日、練馬区独立七十周年記念事業・特別展「映画に魅せられた文豪・文士たち――知られざる珠玉のシネマガイド」において、井上靖のエッセイ「『ピクニック』を観る」のパネル掲載

○朝日カルチャーセンター千葉
平成二十九年四月二十日、講演「井上靖と中国」講師・佐藤純子氏（本財団理事）、聴き手・茂木雅博氏（茨城大学名誉教授）

○井上靖記念館（旭川市）
平成二十九年五月六日、井上靖ナナカマドの会共催、「生誕日無料開館ミニコンサート」木管五重奏「hime」による井上靖ゆかりの曲等の演奏
「井上靖　短編小説を読む」塩尻曜子氏よる朗読、平野武弘氏による作品解説、平成二十九年六月三日「第一回『胡姫』」、八月十九日「第二回『真田影武者』」、十二月二日「第三回『異域の人』」、平成三十年三月三日「第四回『道』」

平成二十九年七月二十九日、文学講演会「『本覚坊遺文』――歴史に潜む〝利休の劇性と謎〟に挑戦」講師・藤澤全氏（元日本大学教授）
平成二十九年九月二日、文学講演会「昭和詩点描――吉田一穂と小熊秀雄」講師・平原一良氏（北海道文学館副理事長）
平成二十九年十月七日、第一回文学講座「井上靖における、生きることと歴史――短編『生きる』から」講師・石本裕之氏（旭川工業高等専門学校教授）
平成二十九年十一月十八日、第二回文学講座「井上靖の義父　解剖学者足立文太郎――『比良のシャクナゲ』を通してその強烈な個性を探る」講師・藤尾均氏（旭川医科大学副学長）
平成三十年一月二十七日、第三回文学講座「井上靖の愛好した言葉」講師・片山晴夫氏（北海道教育大学名誉教授）

○井上靖ナナカマドの会（旭川市立井上靖記念館内）
平成二十九年八月十日、『赤い実の洋燈（ランプ）』五十号発行
平成三十年二月二十八日、『赤い実の洋燈（ランプ）』五十一号発行

○石川近代文学館
平成二十九年五月六日、井上靖顕彰「鑑真まつり」
平成三十年一月六日～三月十一日、企画展「学校のある風景　学都金沢の青春小説」における、井上靖の柔道着、自筆原稿「『流星』の碑・碑文」、「北の海」などの展示と紹介

○井上靖文学館（長泉町）
平成二十九年十二月三日、文学館講座「氷壁の背景とナイロンザイル事件」講師・相田武男氏（ジャーナリスト）
平成三十年二月四日、文学館講座「井上靖の浜松・静岡時代」講師・和久田雅之氏（静岡産業大学非常勤講師）

○東京国立近代美術館フィルムセンター会議室
平成三十年二月一日、発表「新資料　知られざる井上靖の映画脚本」
発表主催：井上靖文学館・東京国立近代美術館フィルムセンター
発見の経緯と概要説明・質疑応答等：岡田秀則氏（フィルムセンター主任研究員）、根本隆一郎氏（ＮＰＯ法人・古き良き文化を継承する会代表理事）、徳山加陽氏（井上靖文学館）、井上修一（本財団理事長）

○ＮＰＯ法人・旭川文学資料友の会
平成二十九年六月二十八日、会報『友の会通信』第十九号発行
平成二十九年十二月六日、会報『友の会通信』第二十号発行

（八）役員
平成二十九年度の本財団の役員（理事・監事）、評議員は次の方々でした。

理事長　井上修一
常務理事　浦城幾世
理事　赤岡昌弘　伊藤　暁　大越幸夫　狩野伸洋　佐藤純子　勝呂　奏
監事　樽井里美
評議員　井上卓也　相賀昌宏　表　憲章　小西千尋　篠　弘　三木啓史　三好　徹　山口　建
（五十音順）

なお理事の伊藤暁氏がご都合により平成三十年度よりご退任になられました。氏は平成十七年より評議員を、平成二十四年より理事をお勤め下さり、本財団のために長年にわたりご指導、ご尽力いただきました。心より御礼申し上げます。
また平成三十年度の理事・監事・評議員は次の方々です。ご支援のほど、よろしくお願い申しあげます。

理事長　井上修一
常務理事　浦城幾世
理事　赤岡昌弘　大越幸夫　岡崎正隆　狩野伸洋　佐藤純子　勝呂　奏
監事　樽井里美
評議員　井上卓也　相賀昌宏　表　憲章　小西千尋　篠　弘　三木啓史　三好　徹　山口　建
（五十音順）

また平成二十九年度の事業を協力して実施していただいております「井上靖記念事業実行委員会」の委員は次の方々です。

委員長
赤岡昌弘（旭川市教育委員会教育長）
副委員長
菅野　浩（ＮＰＯ法人・旭川文学資料友の会会長）
小林　亨（北海道新聞旭川支社長）
委員
荒川美智（ＮＰＯ法人・旭川文学資料友の会理事、旭川市井上靖記念館長）
大鷹　明（旭川市教育委員会社会教育部長）
樽井里美（旭川市教育委員会社会教育課長）
監事
東　延江（ＮＰＯ法人・旭川文学資料友の会理事、旭川文学資料館長）
吉田哲也（北海道新聞旭川支社事業担当部次長）

（九）住所・連絡先
一般財団法人　井上靖記念文化財団
〒一五六―〇〇五三
東京都世田谷区桜三丁目五番九号
電話・ＦＡＸ：〇三―三四二六―九八三六

井上靖記念事業実行委員会　事務局
〒〇七〇―〇〇三六
旭川市六条通八丁目　セントラル旭川ビル七階
旭川市教育委員会社会教育部文化振興課内
電　話：〇一六六―二五―七五五八
ＦＡＸ：〇一六六―二五―八二一〇

図書だより

二〇一七年四月以降に刊行、発表された井上靖に関係する書籍、論文、記事等をご紹介します。

【書籍】

○藤澤全『井上靖『猟銃』の世界――詩と物語の融合絵巻』（大空社出版、二〇一七年四月）

○井上靖文学館編『教科書で読んだ井上靖』（井上靖文学館、二〇一七年九月）

○和久田雅之『井上靖の浜松時代と作品の世界――浜松を中心に、湯ケ島・静岡・掛川』（羽衣出版、二〇一八年七月）

【論文・記事】

○魏大海「〈エッセイ〉井上靖の『蒼き狼』から読む「狼の原理」」（『日文研』五九号、二〇一七年五月）

○勝倉寿一「井上靖「宦者中行説」論」（『福島大学人間発達文化学類論集』二六号、二〇一七年一二月）

○高木伸幸「詩「出発」（井上靖）授業試案――学習者それぞれの「出発」を書く」（『国語国文研究と教育』五六号、熊本大学、二〇一八年一月）

○斉金英「井上靖『しろばんば』と「ホモ・サケル」――「妾」・「あと継ぎ」・「土蔵」」（『The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』八号、二〇一八年三月）

○蘇洋「井上靖「宦者中行説」論――匈奴を愛した中行説像」（『国文学』一〇二号、関西大学国文学会、二〇一八年三月）

○李鈺「井上靖文学における僧侶像――「僧行賀の涙」から『天平の甍』へ」（『現代社会文化研究』六六号、新潟大学大学院現代社会文化研究科、二〇一八年三月）

○蘇洋「井上靖「明妃曲」論――匈奴への憧れの物語」（『関西大学東西学術研究所紀要』二三八号、二〇一八年四月）

○高木伸幸「「おろしや国酔夢譚」論――井上靖のモチーフと史料活用の方法」（『国文学攷』二三八号、広島大学国語国文学会、二〇一八年六月）

○インタビュー／井上修一「父・井上靖の戦中日記」（『Kotoba』三二号、集英社、二〇一八年六月）

○塚本嘉壽「井上靖　冗語（擬態語）について」（『異常心理学からみた中国古典詩――露伴、中島敦、井上靖から晩唐の詩人まで』文藝春秋企画出版部、二〇一八年一一月）

⊙『井上靖研究』第一七号　目次紹介

論文

勝倉壽一「井上靖「異域の人」論――読みをめぐって」
劉淙淙「「洪水」における〈渡河〉の意味――西域という異境」
中嶋一裕「井上靖の詩学」
宮﨑潤一「『北の海』柔道部退部事件の真相――足立浩資料による」
小関一彰「死との対話、生の輝き――『化石』論（二）」

エッセイ

金子秀夫「井上靖「大洗の月」の朗読を聞く」
福田美鈴「井上靖詩集『シリア沙漠の少年』発行のこと」

インタビュー

石原國利「井上靖先生――想い出すこと」（聞き手・田村嘉勝）
根本隆一郎「「新興キネマ」脚本部時代の知られざる井上靖の世界」

〈新資料〉脚本『白銀の王座』

編集後記

北海道胆振東部地震が発生した九月六日の翌日、井上靖記念事業実行委員会が旭川で行われる予定でした。被災された方々に、心よりお見舞い申し上げます。

新潮社版『井上靖全集』は、既発表の著作に限る、という方針で編まれました。編者であった曾根博義先生は、価値のある未発表資料のうち、まとまりをもった資料群は単行本で、断片的な資料は『伝書鳩』で順次公表する、という構想をお持ちでした。『伝書鳩』での連載は十号から開始できましたが、曾根先生のご病気、ご逝去に伴い三回で休載、単行本の方は作品選定の段階で止まってしまいました。

この度高木伸幸先生にご協力いただけることになり、まず単行本の作業を再開しました。初春には書店の店頭に並ぶことになりそうです。今号で掲載した草稿はその中の一篇です。

また『伝書鳩』での連載を再開すべく、断片的な資料の整理も進めていくつもりです。

西村承子

伝書鳩　第19号

発　行　二〇一八年十二月十一日

編集者　西村承子・西村篤
東京都世田谷区桜三―五―九　井上方

印刷所　株式会社　厚徳社

発行所　一般財団法人　井上靖記念文化財団